

in Mongolia

2024年度

JICA九州

教師海外研修

研修国：モンゴル



Discussion



—— 2024年度 教師海外研修 ——

研修概要

教師海外研修概要	2
研修参加者	3
モンゴル紹介	4
研修報告	6

授業実践報告

宮崎県 宮崎県諸塚村立諸塚中学校 夏井 ひとみ	24
熊本県 学校法人九州ルーテル学院 丸谷 美寧 インターナショナルスクール小学部	38
福岡県 飯塚市立穂波東中学校 瓜生 真弓	44
福岡県 福岡県立太宰府特別支援学校 立和田 理恵	50
長崎県 長崎県立島原工業高等学校 大町 淳	56
熊本県 熊本市立泉ヶ丘小学校 赤池 美里	66
佐賀県 学校法人佐賀龍谷学園龍谷中学校・高等学校 徳森 千鶴	74

研修の感想 / スナップ集

研修全体を振り返っての感想	86
スナップ集	90

教師海外研修概要

本研修は、開発途上国の現状や国際協力の現状について、実際に途上国を訪問し、国際協力の現場を体験することで理解を深め、学校での取り組みの向上を図ることを目的としています。

また、研修参加者同士の意見交換や知見の共有を通して、参加者同士や教員間の学びあいのつながりを図ることも目的としています。

2024 年度 教師海外研修の流れ

- 2024年 6月 3日(月) ● 応募締切り
- 6月 24日(月) ● 結果通知
- 7月 6日(土) ● 第1回 事前研修 @オンライン
- 7月 27日(土) ● 第2回 事前研修 @オンライン
- 8月 9日(金) ● 第3回 事前研修 @JICA九州
- 8月 10日(土) ● モンゴル研修 @モンゴル
- ~ 18日(日)
- 9月 28日(土) ● 帰国後研修 @オンライン
- 10月~12月 ● 授業実践 @各学校
- 2025年 1月 25日(土) ● 2024年度 教師海外研修 授業実践報告会 @JICA九州
- 2025年 1月 26日(日) ● 学びあいネットワーク研修 @JICA九州



研修参加者

6

山神成正

YAMAGAMI
SHIGEMASA

NPO 九州海外協力協会
スタッフ

7

宮原良美

MIYAHARA
YOSHIMI

NPO 九州海外協力協会
スタッフ

8

上野史央里

UENO
SHIORI

熊本日日新聞記者

9

赤池美里

AKAIKE
MISATO

熊本県熊本市立
泉ヶ丘小学校

10

徳森千鶴

TOKUMORI
CHIZURU

学校法人佐賀龍谷学園
龍谷中学校・高等学校

11

天津邦明

AMATSU
KUNIAKI

JICA 九州
市民参加協力課 課長



1

夏井ひとみ

NATSUI
HITOMI

宮崎県諸塚村立
諸塚中学校

2

丸谷美寧

MARUTANI
MIINA

学校法人九州ルーテル学院
インターナショナルスクール小学部

3

瓜生真弓

URIU
MAYUMI

福岡県飯塚市立
穂波東中学校

4

立和田理恵

TACHIWAOA
RIE

福岡県立
太宰府特別支援学校

5

大町淳

OMACHI
JUN

長崎県立
島原工業高等学校

モンゴル紹介



モンゴル国の概要

- ・位 置： 東アジア
- ・面 積： 156.4万 km² 日本の約4倍
- ・人 口： 350万人 福岡県の約3分の2
- ・人口密度： 2人 /km² 国連加盟国中で最も人口密度が小さい
1人当たり公式サッカー場 63 面分・家畜 6500 万頭（人口の約20倍）
- ・政 体： 大統領制 議会制民主主義
- ・構成民族： ハルハ族（85%）、カザフ族、プリアート族等の多様な民族
（モンゴル系民族は国外にも居住、中国（580 万人）・ロシア等）
- ・宗 教： チベット仏教 他にイスラム教やシャーマニズム
- ・言 語： モンゴル語 表記はキリル文字（ロシアンアルファベット）・モンゴル文字
- ・産 業： 鉱業（石炭・銅）、畜産
- ・略 史： 1911 年 中国（清朝）から分離、自治政府を樹立
1921 年 ソ連の支援で、中国（中華民国）より独立を宣言
1924 年 モンゴル人民共和国を樹立（社会主義）
1990 年 社会主義を放棄、民主主義へ
1992 年 国名をモンゴル国に変更
- ・伝統文化： ナーダム（夏の祭典） モンゴル相撲・競馬・弓射
音楽 ホーミー、馬頭琴等
料理 白い食べ物（乳製品、夏）、赤い食べ物（肉、冬）
ゲル 移動式住居。遊牧民は年5回ほど移動。

首都 ウランバートル

- ・人口：174 万人（モンゴル総人口の半分）
- ・標高：約 1300m
- ・気候：7 月の平均気温 19.1℃、1 月の平均気温 -21.4℃
- ・建築：中心部 高層マンションの建設が進む。社会主義時代の集合住宅も多い。
周辺部 ゲル地区。近年の移住者が多い。上下水道が未整備。
- ・社会問題：大気汚染、交通渋滞、ごみ処理等

日本との関係

①建国以前

- ・元寇 文永の役（1274 年）、弘安の役（1281 年）

②社会主義時代

- ・1939 年 ハルハ河戦争（ノモンハン事件）モンゴルでは祖国防衛戦争の扱い
- ・1945～1947 年 シベリア・モンゴル抑留

③民主主義時代（現代）

- ・民主化直後の混乱 この際の日本からの支援等が現在の関係に結び付いている。
- ・第三の隣国 地理的隣国の他の友好国、日本はアメリカ・韓国等とこの関係にある。
- ・日本留学 人口千人当たり 1.18 人（かなり高い）
現閣僚 23 人中 3 人が日本留学経験。大統領もホームステイを経験。



研修報告

研修概要

- 2024 年
- 7/6(土) ● 第1回事前研修 @オンライン
 - 7/27(土) ● 第2回事前研修 @オンライン
 - 8/9(金) ● 第3回事前研修 @JICA 九州
 - 8/10(土)~8/18(日) ● モンゴル研修 @モンゴル
 - DAY1 (8月10日(土)) - 福岡空港出発、チンギスハーン国際空港到着
 - DAY2 (8月11日(日)) - ダルハンへ移動
 - Day3 (8月12日(月)) - 「太陽の子どもたち」児童養護施設
- 草の根技術協力事業 玉ねぎ農場
 - Day4 (8月13日(火)) - JICA モンゴル事務所
- モンゴル歴史民族博物館
- ガンダン寺
 - Day5 (8月14日(水)) - モンゴル日本病院
- オイスカ・モンゴル総局
 - Day6 (8月15日(木)) - 新モンゴル学園
- GOBI 工場
 - Day7 (8月16日(金)) - モンゴル日本人材開発センター
- 在モンゴル日本国大使館
- JICA モンゴル事務所
 - Day8 (8月17日(土)) - ノゴーン・ノール公園 (日本人抑留者採石場跡)
- ダンバダルジャー日本人慰霊碑
- JAPAN FESTIVAL in Mongolia
- チンギスハーン国際空港出発
 - Day9 (8月18日(日)) ● 福岡空港到着
 - 9/28(土) ● 帰国後研修 @オンライン
 - 10~12月 ● 授業実践 @各学校
 - 2025 年 1/25(土)・26(日) ● 開発教育学びあいネットワーク研修 授業実践報告会 @JICA 九州

事前研修

第1回事前研修

日程・場所 2024年7月6日（土）オンラインにて実施

内容

1. アイスブレイク（自己紹介を兼ねて）
2. 教師海外研修の趣旨／JICA事業の説明、JICAのモンゴルにおける役割
3. モンゴルについて情報共有（元JICAモンゴル事務所職員 ジャワハラン氏）
4. ディスカッション（各教員の研修で学びたいことの発表、役割分担）

感想

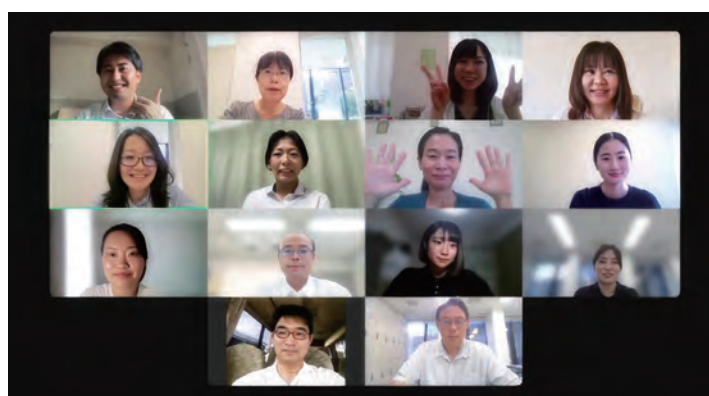
第1回事前研修では、オンラインであったが、教師海外研修に参加するメンバーとの初顔合わせの機会となった。一人一人の自己紹介を聞きながら、魅力ある参加教員との出逢いや研修への思いを共有する中で、自然と教師海外研修への期待が高まっていった。

JICA事業の説明、JICAのモンゴルにおける役割では、SDGs、ODAの役割、開発途上国への取り組みなど、初めて聞くことばかりであった。「中央アジア5ヶ国とコーカサス3ヶ国との関わり」「計画経済から市場経済への移行」「資源国としてのモノカルチャー経済」など貴重な情報ばかりであった。

またモンゴルについての情報共有（元JICAモンゴル事務所職員 ジャワハラン氏）では、「モンゴルと聞いて思い当たることは？」のジャワハラン氏の質問から、「大草原」「ゲル」「馬頭琴」「モンゴル書道」など参加教員のイメージなどモンゴルへの興味の入り口に始まり、モンゴルの歴史や地理、経済、そして今抱える課題など少しずつ内容が深まっていき、モンゴルの魅力に引き込まれていった。特に興味を引かれたのが、モンゴルの社会課題についてだった。「ウランバートル市の交通渋滞」や「ウランバートルの世界トップクラスの大気汚染問題」「ゲル地区（※1）」などである。経済発展と環境問題、モノカルチャー経済と近隣諸国との関係などモンゴルについて、より深く学んでいく必要があると感じた。

その後、参加教員それぞれで研修に向けたテーマ設定を掘り下げていく有意義な時間となった。この参加教員との出逢いという一期一会を大切に、一人一人がよりモンゴルに思いを馳せて探求していくための意識が高まった。みな今後の研修が待ちきれない様子であった。（松下）

※1 ゲル地区とは、遊牧民が首都へ移住し建てたゲル（移動式住居）が市街地周辺に密集している地域。水道等のインフラが未整備で、暖房や調理に使われる石炭が首都の大気汚染を悪化させている。



第2回事前研修

日程・場所 2024年7月27日（土）オンラインにて実施

内容

1. アイスブレイク
 - ・モンゴルのリサーチ、身の回りの地域や日本でのモンゴル探し
 - ・モンゴル研修に向けての情報共有
2. 活動体験談（オイスカ・モンゴル総局／一般財団法人くまもと未来創造基金 宮原 美智子氏）
 - ・モンゴルで今おきていること
 - ・オイスカ・モンゴル総局について、くまもと未来創造基金の活動について
 - ・今後のモンゴルとの関係と活動について
3. 今後の研修について（モンゴル研修の日程、帰国後研修、学習指導案など）
4. 意見交換（役割分担、現地での出し物など）

感想

第1回事前研修からの課題であった「身の周りにあるモンゴル」について、調べたことを参加教員で発表した。相撲、スーホの白い馬、ユニクロのカシミア、元寇、都城市との姉妹都市関係、カルピスが馬乳酒由来であることなど初めて聞く内容や意外な関係性などを知り、それぞれにモンゴルへの興味がふくらんでいる様子だった。オイスカ・モンゴル総局／一般財団法人くまもと未来創造基金 宮原美智子氏の活動体験談では、モンゴルで今おきていることやオイスカ・モンゴル総局と（一財）くまもと未来創造基金の活動についてお話を聞くことができた。

急速な自由経済の発展と経済格差、インフラ整備の必要性、福祉・医療の充実などモンゴルの直面する課題があることを知った。また、宮原氏の「国境をこえたコミュニティづくり」によるモンゴルの女性が自立して自分らしく輝くためのステージづくり・ハンドメイドグッズ販売や、植林活動、廃食油・ワンコイン寄付の活動など、日本とモンゴルをつなぐ思いある活動の最前線を見ることができた。「自分たちの地域は自分たちで守る」という宮原氏の活動や貴重なお話から得たものを、今後の研修やテーマ設定にいかしていきたいと考える。（松下）



第 3 回事前研修

日程・場所 2024 年 8 月 9 日（土）JICA 九州センターにて実施

内 容

1. アイスブレイク（ペーパービルディング、ジェスチャーゲーム）
2. JICA モンゴル事務所から（JICA モンゴル事務所職員 甕（もたい）暁子（あきこ）職員）
・安全講習、質疑応答
3. 昨年度教師海外研修体験談（基山町立基山小学校 河室 陽子教諭）
4. モンゴル研修に向けての情報共有
・日程確認、役割分担打ち合わせなど

感 想

これまでオンラインでの研修であったが、第 3 回事前研修で参加教員とスタッフとの初めての対面となった。まずはそれぞれで自己紹介をして、それぞれにコミュニケーションを図る有意義な時間となった。ペーパービルディング、ジェスチャーゲームなどを通して、さらに関係性を深める時間となった。JICA モンゴル事務所職員の甕暁子氏からは、モンゴルとのオンラインでの情報提供をいただき、現地の気象情報や、防犯対策、現地で意識する行動など貴重な情報を聞くことができた。

昨年度教師海外研修体験談では、河室氏から国際理解教育に対する見解や昨年度のベトナムでの教師海外研修の感想、研修帰国後の実践例などをお聞きすることができた。その中で、「教師というフィルターを通してその国を学ぶ」「世界に目を向ける背中が、子どもたちに世界に目を向かせる」「最初に感じた空気感を大切にしてほしい」など印象に残る言葉ばかりであった。河室氏の熱量に感化され、モンゴルへの教師海外研修への意欲と期待がさらに高まった。この研修で何を学び、何を子どもたちに伝えられるのか、具体的にイメージしつつあると感じた。現地での体験により深みをもって、それぞれに教員人生の糧となる実り多き研修にしたいと強く思った。（松下）



モンゴル研修

2024年8月12日（月）

○児童養護施設「太陽の子どもたち」

モンゴルの首都ウランバートルから車で北へ4時間、ロシアとの国境近くに、オール県ダルハン市（人口約11万人）がある。以前は製鉄業で栄えた街だ。しかし、この街もソビエト連邦の経済崩壊のあおりを受け、多くの工場が閉鎖され、マンホールチルドレンが多く見られるようになった。そのような状況に胸を痛めた1人のモンゴル人女性エレデネ・チュルーン女史が小さな施設を立ち上げた。その施設が児童養護施設「太陽の子どもたち」だ。マンホールチルドレンを施設に収容し、育ててきた。貧しいながらも職員は子どもたちに豊かな愛情を注ぎ、将来の子どもたちの自立の為に費用を捻出してモンゴルの伝統芸能（踊り、楽器、歌、曲芸、切り絵などの工芸）を習得させた。施設の子どもたちは、日本でコンサートを数回にわたり、行っている。

視察日には、子どもたちとの交流を兼ねて、日本文化（折り紙・めんこジャンケン・コマ・竹とんぼ・書道）を紹介した。最後に、「幸せなら手をたたこう」を日本語とモンゴル語で歌い、音楽交流を深めることができた。

子どもたちが発表した伝統的な演奏や踊りから、多くの愛（想い）を感じた。エレデネ・チュルーン施設長の子どもたちへの愛に溢れているからこそ、子どもたちも伝統工芸を愛で表現できるのではないかと思った。施設長の言葉に「才能は見出すもの」とあった。子どもたちの才能や可能性を引き出すことが大事であり、子どもたちの才能や可能性を引き出すことのできる教師で在りたいと思いを深めた施設視察だった。



施設視察のオープニングの様子

○玉ねぎ農場

草の根技術協力事業玉ねぎモデル案件モデル農場施設では、農場見学を行い、活動経緯や現状、課題、今後の展望の講話を聴いた。これまで種子や種球を輸入していたモンゴルで、輸入に頼らず、モンゴル産の玉ねぎを安定して栽培できるようになることを目指して、数種類の玉ねぎを栽培しながら現地に合う種子や種球を現在探っているプロジェクトだ。

この事業を実施する北海道滝川市の（一社）滝川国際交流会プログラム・コーディネーターであるナンザド氏の「玉ねぎの生産のサイクルをモンゴルだけで回す」という言葉に、自立の精神を強く感じた。

改めて、モノや技術の提供だけでなく、現地の人々の意識や心構えも育てていくことが国際協力の大事な役目だと思った。（夏井）



プロジェクトの説明をする
ナンザド氏

2024 年 8 月 13 日（月）

○JICA モンゴル事務所

【モンゴルの社会問題及び ODA の状況】

モンゴルの社会問題及び ODA の状況について、お話をいただいた。モンゴルが抱える社会問題には、貧困・格差や大気汚染の問題等がある。首都のウランバートルは 50 万人を想定した都市であるが、現在は 173 万人が住んでおり、モンゴルの全人口の 49%が集中している。それによるゲル地区の拡張があり、貧困や格差の問題がある。また、ゲル地区の住民による冬場の暖房・調理用の石炭使用及び、近年急増している車両からの排ガスによる大気汚染の課題がある。その他に、工場排水による汚水流入の問題や地震災害への懸念、社会保障分野における課題等、多くの開発途上国が抱える問題がモンゴルにもあることが理解できた。

これらの社会問題に対し、日本企業の投資・進出動向、人材育成奨学計画等について説明を頂き、日本は最大の援助国であることを知ることができた。途上国支援の世界について具体的に理解できた。「持続可能な経済成長の実現と社会の安定的発展」を大目標として掲げている JICA の果たすべき役割の大きさを改めて感じた。

【JICA 海外協力隊活動状況】

JICA海外協力隊5名の隊員から活動状況についてお話をいただいた。モンゴルの教育現場について、大変興味深い内容であった。これまで日本の教育が当たり前だとは思ってはいなかったが、モンゴルの教育現場について聴き、驚くことが多々あった。

JICA 海外協力隊員が、現地の教職員等とコミュニケーションをとりながら、元来あるモンゴルの教育との調和をとりつつ、教育環境の改善やカリキュラムの作成、教員の指導力向上に尽力されていることがわかった。隊員の方々が各々の学校等において果たすべき役割を見出し、使命感を持って職務に取り組まれていると感じた。



○モンゴル歴史民俗博物館

モンゴル歴史民俗博物館はウランバートル市にある。古代から現在のモンゴルに至るまでの歴史・民俗学・文化的遺産等が展示されていた。モンゴルの民族衣装や装飾品、伝統文化に触れることができた。モンゴルの歴史を巡る、有意義な時間を過ごすことができた。



○ガンダン寺

ガンダン寺はウランバートル市にある。お寺の敷地内にはたくさんの建造物があり、短時間ではとても回り切れないほどであった。また、とても都会に建立されているとは思えないほどの規模で壮観であった。たくさんの僧侶の方が、本堂に向かって経を唱えられており、その様子は圧巻であった。さらに、僧侶ではない一般の方々も何百人とお堂に向かっており、このお寺がモンゴルの人々からの信仰が厚いお寺だということを感じた。



○スフバートル広場（チンギスハーン広場）

モンゴルの英雄であるスフバートル（※2）、チンギスハーンの名がそびえたつ広場であり、美しい広場であった。この広場から国会議事堂、外務省、オペラハウスなどの施設が周囲に建ち並んでいた。（瓜生）

※2 ダムディン・スフバートルは 1920 年代のモンゴル人民共和国設立に貢献した革命家



■ 2024 年 8 月 14 日（月）

○ モンゴル日本病院視察

日本の支援で建てられたモンゴル日本病院は、日本で言う大学病院にあたり、誰でも利用することができ、救急患者の受け入れも可能。

ここでは 104 の病床に対して 2000 人の入院が必要な患者がいる。保険制度は存在しておりほとんどの人が加入している。入院病棟が少ない中、モンゴルの保険適用の入院期間は 7 日間である。それ以降は通院になる。もちろん長期治療が必要な、例えば人工呼吸器を必要とする患者は随時延長することができる。基本的には、7 日間の保険適用による入院期間以上は自己負担となるため、多くの場合治療は退院後に自宅で行うセルフケアや家族介護が中心となる。

モンゴルの伝統医療は物理治療がほとんどで、カップリング治療や針治療がメインである。また電気治療なども行われている。そのため自分でリハビリを行う、自主トレーニングを行うという意識が弱い。退院するまでに、セルフケアができるようになるかが課題になっている。

JICA 海外協力隊員の話によると、ODA による資機材調達で、「モノ」は揃いやすいが、壊れると日本とは異なり修理をする人がいない。自分の専門外のモノも多い中、何とか使えるようにしたり、壊れないよう使ったりしている。

○ オイスカ・モンゴル総局

オイスカ・モンゴル総局は、農業開発や環境保全を推進して、日本とモンゴルの懸け橋となっている。ここでは、熊本 × モンゴルプロジェクトと協力して、モンゴルのハンドメイドグループの製品を日本に紹介・販売を通し収益から女性の就労支援を行ったり、様々な交流活動を行っている。多くの羊毛を製品にしている（立和田）



モンゴル日本病院での撮影



ハンドメイド品

2024 年 8 月 15 日（月）

○新モンゴル学園 高等部サマースクール視察

この学校は日本式の教育活動を行い、「知・徳・体」の調和がとれた教育を行っている。日本の教育カリキュラムを拡充して使用すること、生きる力を育む課外活動の実施、部活動やクラブ活動への参加などからも、日本の教育スタイルを多く取り入れていることが分かった。各教室を見て回ると、モンゴル人の先生方だけでなく、日本から来た大学生が日本語の授業をする姿が見られた。「和歌とは何か」というテーマで、日本人でも理解が難しい内容を学んでいた。廊下には日本語や日本文化を紹介する掲示物がたくさんあり、学びの足跡が残されていた。

次にサマースクールに来ている高校生と交流をした。交流の前半では、日本語を学習している生徒がモンゴル文化を日本語で紹介してくれた。食べ物、祭り、都市と田舎のメリット、デメリット、歴史などをイラストと上手な日本語で伝えていた。後半ではモンゴルの環境問題を中心に、どのように解決すべきと考えているのかをスライドを使って日本語でプレゼンしていた。排水のシステムが整備されていないことに注目したグループでは、排水の穴を作るべきだと分かっているが、どのように作れば良いかなどについて理解しているエンジニアがいないため、他国に学びに行く必要があると感じているようだった。生徒たちの日本語のレベルの高さはもちろん、国のために何が出来るかをジブンゴトとして捉える姿がとても頼もしかった。

生徒は、母国語であるモンゴル語に加え、4年生から英語、8年生からは日本語を学ぶそうだ。保護者からの「1年生から外国語を学ばせたい」というニーズもあるようだが、これは受け入れない。「まずはモンゴル人をつくります」、学園長が言われた言葉で1番印象に残っているものだ。ここの生徒たちは本気で国を良くしようとして学ぶ。留学は外国の良さを持ち帰るものとして活用する。モンゴルの外に賢い人材を流出させないのだ。数年後、交通渋滞や洪水問題、大気汚染問題など、抱える問題に立ち向かう彼らの様子が目に浮かぶ。



生徒がモンゴルの歴史を発表する様子



○GOBI 工場

この工場は1977年に日本政府による無償資金協力として建設され、2007年に民営化されたそうだ。ここで作られた製品は国内市場の84%、世界市場の74%を占めており、モンゴルのカシミヤ産業分野における主要工場となっている。モンゴル5大家畜の1つであるヤギを原材料として、3～5月に白、グレー、ベージュ、ブラウン等の色の毛を集め、量よりも品質を重視しながら製品をつくるそうだ。生産過程の中には、機械を取り入れる部分と手作業で一つ一つ仕上げる部分があり、工場で働く人々は高い集中力で作業に取り組んでいた。品質基準を満たさないものは、洋服ではなく寝袋や布団にするなど、原材料を大切に生産も意識していた。完成した製品を触てみると、ふわふわなのにサラサラで、日本で売っているカシミヤとは別物のように感じた。（赤池）



GOBI 工場

2024 年 8 月 16 日（金）

○ モンゴル日本人材開発センター

到着するとまずは、センターの概要説明を受けた。当センターでは、日本語教育だけでなく、日本式経営教育にも力を入れている。近年では大手企業に対する経営指導でも高い評価を受けているそうだ。次に、日本語クラス初級受講者との交流を行った。まず目に入ったのは七夕の短冊、そして校内の掲示物だ。平易な日本語で書かれた多読用の日本語の冊子が置かれており、貼られたポスターには「神風」「アイドルオタク」といった多岐にわたるテーマで学習者が日本文化への理解を深めているのがわかる。授業は、小学生クラスとそれ以上のクラスに別れており、中高生を主に幅広い世代が日本語を勉強していた。職員は、日本語ブームが起こった世代が親になり、その子どもたちが親の影響で日本語を学んでいるという。写真や地図を使いながら、簡単な自己紹介をし、あなたの家族は何人ですかという質問で会話を続けていく。隣の教室では、現地のモンゴル人日本語教員研修も行われていた。施設の資料も充実しており、日本語の学習教科書や小説、漫画が多く配架されている。なかには、フェルトで作られた日本昔話の本もあった。帰り際には、翌日の JAPAN FESTIVAL in Mongolia の出店に向けて、浴衣姿で準備をしているスタッフの姿も見られた。先ほどの交流で、ある少女が「村上春樹が好きだ。」と言っていたことを思い出す。日本の文化や将来の仕事が身近にあることで、さまざまな地域から集まる受講者たちが興味関心を持って日本語学習を続けていける環境なのだろう。「はじめて日本人と話せてうれしい」と言ってくれた受講者もあり、互いにもっと話したい、わかりたい、というもどかしさをともに感じた時間となった。



幸せなら手をたたこうを歌う様子

○ 在モンゴル日本国大使館表敬訪問

お昼に伝統的なモンゴル料理を楽しんだ後、在モンゴル日本国大使館に向かった。厳重な警備を抜けると、厳肅な雰囲気を漂わせる玄関口に通される。緊張感を高めながら、日本美術が飾られた階段を登り、部屋に入った。プロのサッカー選手をはじめ、モンゴルゆかりの著名人たちのものと思われる、トロフィーや横断幕が飾られていた。参加教員それぞれが、これまでのモンゴル研修で特に印象に残った箇所について感想を述べた。

○ JICA モンゴル事務所

この研修で2回目となる訪問だ。JICA モンゴル事務所が入っている豪華な高層ビルに向かった。前回、高校生やインターン生など多くの来訪者とともにモンゴルについて話を聞いたのが遠い昔のようだった。前日の夜にまとめた、モンゴル研修全体を振り返って教員団として感想を代表者が述べる。その後、参加教員がこの研修での発見や思いを言葉にし、JICA 職員から質疑応答を受けた。モンゴルでの実質的研修期間は、あと1日だ、という焦燥の念とともに、自分の実践の場と研修全体を振り返る時間を持つことができた。(丸谷)

JICA モンゴル事務所での報告会



2024 年 8 月 17 日 (土)

○ ノゴーン・ノール公園

ウランバートル・チンゲルテイ区（ゲル地区）にある住民の憩いの場、ノゴーン・ノール公園。バスを降り、徒歩で丘に登ると一面ゲル地区が一望できる。見晴らしが良く、気持ちのよい風が頬を触れる。一方標高が高いせいか、少々息切れもした。実はここ、第二次世界大戦後に日本人抑留者が送られた場所だった。シベリアだけではなかったのか…。私たちは、まずその事実衝撃を受けた。ウランバートルの中心にあるスフバートル広場近くのモンゴル国立オペラ・バレエ劇場、政府庁舎等の石材も日本人抑留者が採取して建てたことを知る。採石場がいつしかゴミ捨て場となっていたこの場所に光をあてたのは、この近くに住むモンゴル人のウルジートクトフさんだった。私財を投じ、日本人抑留者採石場跡に池を作った。夏はボート、冬は凍った水の上でスケートが楽しめる。2022 年には日本人抑留者の歴史をたどるゲル資料館「さくら」を開館、今なお増築しているそうだ。「初めは、日本人に対していい印象はなかった。しかし、資料を集めたり、当時監視員だった人達の話の聞いたりする中で、日本人の仕事の丁寧さや真面目さ、規律正しさなどを知った。徐々に気持ちは変わっていった。同じ人間なのだと。この歴史を知った私たちは、戦争の記憶と平和の大切さを後世に伝えていく必要がある。」というウルジートクトフさんの言葉が心を震わせた。最終日のこの地でまた改めて、祖先への誇りと尊敬の念を抱くとともに、人と人との繋がりこそが人の心を動かすことを感じた。



ウルジートクトフさん

○日本人墓地・ダンバダルジャー日本人慰霊碑

到着時、雨足が強くなった。私たちの心を表している様でもあった。「日中に太陽が真上に昇るとちょうど日の丸の形になるんですよ。」大きなモニュメントは、日本を思慕させる構造になっていた。第二次世界大戦の戦死者や抑留者の遺骨が今なおこのモンゴルの地に眠っており、遺骨収集は続いていると伺った。冷たい雨風を感じながら犠牲になった方々を追悼し、今後の日本・モンゴル両国の平和大使として私たち1人1人が日本の子ども達に伝えていくことを心に誓った。



雨の中での視察



日本人墓地ダンバダルジャー日本人慰霊碑

○JAPAN FESTIVAL in Mongolia 2024 ～すべては将来のために！～

この短いモンゴル滞在で、出会った人たちと再会できると誰が思っただろう。よく考えたら日本とモンゴルの架け橋の方々なので、その場にいるのは当然のこと。しかし、異国の地で知り合った方々と再会する喜びはひとしおだった。ステージでは、日本伝統芸能や文化の紹介、テントブースでは日本製品を扱う企業、日本料理販売、浴衣体験、日本昔遊び体験。若者の来場者は、日本アニメのコスプレ姿が目立った。皆で1つずつ食したたこ焼きが胃にしみた。また、今回私が渴望していた日本・モンゴル書道交流もできた。日本のように学校教育でモンゴル書道（ユネスコ無形文化財）はないようだが、日常キリル文字を使用しているモンゴルが、自文化教育として小学6年生からモンゴル文字を学んでいる。その環境が実り、今の若い世代はモンゴル文字の読み書きができる。今後、書道でも日本・モンゴル両国の草の根文化交流ができたらと思う。（徳森）



JAPAN FESTIVAL での様子

帰国後研修

日程・場所 2024年9月28日（土）オンラインにて実施

講師 小川由有氏（福岡県筑前町教育委員会）

内容

1. モンゴル研修の感想等（参加教員）
2. 講話（小川氏）
3. 学習指導案の発表（参加教員）と講評（小川氏）
4. 学習指導案に関する対話・議論（参加教員等）

講和の内容（一部抜粋）

- ・エジプト研修とその後
- ・今のワクワク感を今年のうちに伝える。
- ・国際理解教育で育成を目指す資質・能力
- ・授業実践に向けてのアドバイス
 - 目標を明確にする（内容を欲張りすぎず、伝えたいことを絞る）
 - 目標を達成した子供の具体的な姿をイメージする
 - 実態とゴールのギャップを埋める

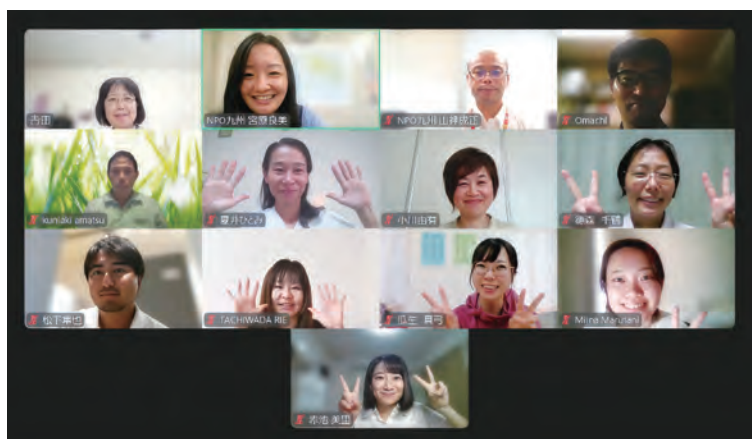
感想

日々衝撃を受け続けたモンゴル研修から1カ月半。参加教員は、学習指導案の作成に留まらず、皆、自発的な活動を行っていた。私にとって、この研修は冒頭から刺激的であった。

小川氏の講演は、経験に基づく助言であり、参加教員の現状に寄り添う内容であった。

校種等の立場やアイデアの違いから、学習指導案は多様であった。国際理解教育／開発教育がもつ、様々な可能性を示していると感じた。それらに対して、講師の小川氏から丁寧に講評をいただいた。私は、授業の目標に関し多くのアドバイスをいただき感謝している。

今後も皆から貪欲に学び、そして、私も皆に胸を張れる授業をしたいと思った。（大町）



学びあいネットワーク研修 (授業実践報告会)

日程・場所 2025年1月25日(土)・26日(日) JICA九州(北九州市)

講師 1月25日(土) 小川由有氏(福岡県筑前町教育委員会)
1月26日(日) 伊沢令子氏(特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター)

内容

(1月25日(土))

1. 授業実践報告(参加教員)
2. 質疑応答・講評(小川氏)

(1月26日(日))

研修 ファシリテーター(伊沢氏)

1. 参加型で学ぶ国際理解教育・開発教育の共通基盤づくり
2. 他人事を自分事に・気づきを行動に
3. はじめよう! つながろう! つづけよう!

感想

充実はしていたものの、それなりに大変であった研修の数々。締めくくりとなる小川氏の講評のなかに、ねぎらいの言葉があった。ホッとしたのは私だけではなかったはず。この小さな一歩を踏みしめながら、次の一歩を踏み出す勇気をいただいたようだ。

そして、翌日の伊沢氏の研修。まさに次の一歩であった。児童・生徒の立場と、教師の立場とを行き来し、国際理解教育/開発教育を体験していく。この研修は、いつか役に立つ。そう確信したが、考えが甘かった。翌週には、研修に工夫を加えた授業報告が、メンバーから続けざまに伝わる。二歩も三歩も先を歩む仲間。私も前へ歩んでいくよ。

JICAの教師海外研修ならば、普通の海外旅行では得られない経験ができるはず。参加教員全員の志望動機に、必ず含まれていた期待である。そして、期待以上の経験をモンゴルで得た。

さらに期待を越えていたのが、事後研修である。自主性は重んじられていたが、過去の研修を元に、さらに練り上げられたと思われる研修であった。事前研修やモンゴル研修に伏線が用意されていたことも、ここで回収しながら気が付いた。

1月の学びあいネットワーク研修は、参加教員同士で顔を合わせた2回目の機会であった。しかし、私たち参加教員には、昔からの友人と再会したような喜びがあった。国際理解教育に関心をもち、多くの感動を共有した貴重な仲間である。

これからも、このような機会を用意していただいた関係各位には、本当に感謝しかない。いただいた恩は、必ず、誰かに手渡していきます。(大町)



研修の様子



集合写真

授業実践報告

村から世界へ旅しよう

夏井 ひとみ 宮崎県諸塚村立諸塚中学校

- 教科・科目：英語科 ■対象学年（人数）：全校生徒 26 名
- 実践年月日・期間（時数）：2024 年 6 月～2025 年 2 月（8 時間）

【実施概要】

1. 単元名（活動名）：村から世界へ旅しよう					
2. 実践する教科・領域：	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）： ・ 自国の文化について英語で紹介でき、交流国について理解できる。（知識・技能） ・ 自分のことや考えを英語で表現できる。（思考・判断・表現） ・ 積極的に交流会やスピーキングテストに参加することができる。（主体的に学習に取り組む態度）					
5. 単元の評価規準	①知識及び技能	自国の文化について英語で紹介でき、交流国について理解できる。			
	②思考力、判断力、表現力等	自分のことや考えを英語で表現できる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	積極的に交流会に参加することができる。			
6. 単元設定の理由・単元の意義 (児童 / 生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由あるいは単元の意義】 自国の文化をPRする単元である。ゴールは、自国の文化について英語で紹介したり、交流国の文化を理解できたり、積極的に自分の考えを英語で表現できることである。その紹介内容を聞き手に伝わるように表現したり、交流国のことを聴き取り、理解でき、交流を深めていかせたい。年間を通して、多くの国と交流し、英語の表現で異文化理解を深めていくことは大変意義深い。				

【児童／生徒観】

諸塚村立諸塚中学校の全校生徒26名（1年6名、2年11名、3年9名）は、森林に囲まれた自然豊かな環境のもと、高い志と向学心にあふれた生徒たちである。また、「自分に誇りと自信をもった生徒の育成」を教育目標に日々の教育活動に取り組んでいる。年間を通して、「村から世界へ」をテーマに、外国との交流を図って来た。多くの生徒が、外国に興味を持っている。特に、第3学年の生徒たちは、昨年度から、自国文化やふるさを交流国に紹介し、交流国の生活文化など、学んだことを英語で表現してきた成果もあり、高い英語力を身に付けている。

【教材観】

生徒たちは、昨年度からバングラデシュ、ミャンマー、スリランカなどのアジア国と交流し、英語を中心に多言語文化交流を図っている。モンゴルとの交流も、英語、日本語、モンゴル語と多言語文化での交流を深めていきたい。

【指導観】

生徒たちのプレゼンテーションとフリートークの時間を設定し、多言語で交流を図る。音楽交流では、交流国の「幸せなら手をたたこう」を英語、日本語、で歌い、音楽での交流の楽しさを味わわせたい。展開前半では、諸塚中学校の生徒たちとモンゴルの生徒たちの自国文化の紹介をプレゼンテーションし、相手に自分たちの国や文化について伝える表現力を高めさせたい。展開後半のフリートークでは、自分の考えを理由とともに積極的に意見させたい。まとめでは、交流国について、学んだことを表現させたい。

7. 単元計画（全8時間）

時	ねらい	学習活動	資料等
1	○異国文化・自国文化理解 ○言語活用能力向上 （話すこと・やり取り）	英語授業：ミャンマーとの交流会 ※資料1参照	
2	○異国文化・自国文化理解 ○言語活用能力向上 （話すこと・やり取り）	英語授業：スリランカとの交流会 ※資料1参照	
3	○異国文化・自国文化理解 ○言語活用能力向上 （話すこと・やり取り）	英語授業：スリランカとの交流会 ※資料2参照	
4 本時	○異国文化・自国文化理解 ○言語活用能力向上 （話すこと・やり取り）	英語授業：モンゴルとの交流会 ※資料2参照	JICA九州教師海外研修視察先「新モンゴル学園」との交流
5	○異国文化・自国文化理解 ○言語活用能力向上 （話すこと・やり取り）	英語授業：オーストラリアとの交流会 ※資料2参照	

6	○異国文化・自国文化理解 ○言語活用能力向上 (話すこと・やり取り)	英語授業：・アメリカの音楽文化交流 ・エジプトの言語文化交流 ・フィリピンの食文化交流 ※資料3参照	
7	○国際性豊かな人材育成	英語授業：・土居様 (モンゴル在住栄養士) ・キャリア教育講話 ※資料4参照	JICA九州教師海外派遣視察研修先モンゴル日本病院栄養士土居様講話(JICA海外協力隊)
8	○異国文化・自国文化理解 ○言語活用能力向上 (話すこと・やり取り)	英語授業：モンゴルとの交流会	JICA九州教師海外研修視察先新モンゴル学園との交流

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい：

- 自国の文化について英語で紹介でき、交流国について理解できる。(知識・技能)
- 自分のことや考えを英語で表現できる。(思考・判断・表現)

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	1 オープニングセレモニーをする。 (1) 日本の音楽文化「琴」演奏を披露する。 (2) 交流会の説明を英語でする。	○自国の音楽文化を紹介し、言語交流だけではなく音楽文化においても交流を深められることに気付かせる。	パソコン タブレット TV画面(Zoom) 交流曲 ギター
展開 前半 (10分)	2 諸塚中学校の発表 自国文化を自作プレゼンテーションで紹介する。 3 交流国からのプレゼンテーションを聴く。	○自国文化を分かり易く説明させる。 ○関心事について、積極的に質問をさせる。	

展開 後半 (30分)	4 モンゴルの生徒と交流する。 (フリートーク) (1) あいさつをする。 (2) 自己紹介をする。 (3) 好きなアニメを話す。 (4) 好きな食べ物を話す。 (5) 地元のPRをする。 など	○既習単語や既習用法 を使って、自分や自国 文化について2文以上 を使って話させる。 ○交流国について知り たいことを既習文法を 使って質問させる。	
まとめ (8分)	5 学びの共有をする。 (1) 諸塚中学校生徒の感想を発表する。 (2) モンゴルの生徒の感想を聴く。 6 写真撮影をする。		
9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法） ○自国の文化について英語で紹介でき、交流国について理解できたか。（知識・技能） ○自分のことや考えを英語で表現できたか。（思考・判断・表現）			
10. 学習方法および外部との連携 令和6年10月から1月の計画は、添付した学習内容で国際理解教育とキャリア教育の学びを深めていきたい。カリキュラムマネジメントとして、村立学校での小規模な学校実態であること、外部資源（外部講師）を生かし、村から世界へと羽ばたく人材育成、諸塚中学校の教育目標である「高い志と向学心にあふれ ふるさとを愛し自分に誇りと自信をもった生徒を育成する」から教育効果を考え、カリキュラムマネジメントした授業計画とした。 10月からのモンゴルやスリランカの英語を母国語としない外国人との交流から多言語文化社会の魅力に気づかせ、1月に実施するキャリア教育では、「共生と共創」をテーマに、自分自身が「世界の中の日本人であること、日本人として自分に何ができるのか、世界が日本人である自分に求めていること」など、共生し、双方又は相国で新しい創りがあることを学び、今後の生き方の学びに繋げていきたい。			
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み 人権教育や道徳の授業を合わせた取組を考えている。 ※資料5参照			

【自己評価】

12. 成果	○世界への興味・関心を高めることができ、英語力を高めることができた。(諸学力検査の結果は高い結果を収めている。) ○外国人と積極的にコミュニケーションを図ることができる。 ○カリキュラムマネジメントによって、系統的、横断的に取り組むことができ、異文化を理解し、共生する社会への意識を高めることができた。 ○自分の考えをプレゼンテーションや会話で表現し、意欲的に交流会に参加することができ、村から世界へと新発見する楽しさを味わうことができた。
13. 課題	○フリートークで用いる言語能力として、学年においての既習内容をじっくり、しっかり深める必要があった。 ○交流学校との交流実施計画に時間がかかり、実施日の調整が難しかったので、年度当初から年間計画を立て、実施日を決定する必要があった。 ○50分単位では、時間が少ないので、2コマで実施するなど、英語の授業だけではなく、横断的に、総合的な学習の時間など、学年や学校の取組単位で実施すると時間捻出できるかもしれない。
14. 改善点	○年度当初に実施計画や実施日を交流学校と打合せし、実施日時を決定する必要がある。 ○時間捻出のために、学年や学校としての取組理解が必要である。
15. 学びの軌跡 (児童生徒の 反応、感想文、 作文、ノート など)	○生徒ワークシートを添付資料とする。※資料6参照 ○10月実施のモンゴルとの交流会動画内にあるスピーキングテストにおける英語力の向上
16. 授業者による 自由記述	交流会を重ねるごとに、生徒たちの積極性や意欲が高まっていくのが分かり、体験型学習の効果を実感することができました。特に、生徒たちは、モンゴルとの交流会での音楽交流を楽しみ、言語と音楽でのつながりを味わっていました。交流会での学びを、生徒自作プレゼンテーションで、モンゴルの食や有名なスポーツ、観光地などを英語でしっかり表現することができました、私自身の体験談も効果があり、教師海外派遣をまとめた私の自作動画からモンゴルに興味を持ったようです。教科書や机上のもので学ぶよりも実際に体験してきた教師自身の体験談や自作動画(写真含む)がより効果的な教材であることを実感することができました。 更には、12月にはグローバル人材育成をねらいとして、JICA海外協力隊の土居様に講話頂いたことで、英語学習の大切さ、海外で働くことの魅力、世界と自分自身で共創する楽しさを講話頂き、生徒たちは、将来に向けて、「海外とつながること、世界を共創する楽しさ」という進路選択の一つを土居様から教えて頂きました。

「村から世界へ旅しよう」という単元で、多くの国と交流をしてきました。村から世界につながる楽しさを味わい、世界を身近に感じることができました。2月には、再度モンゴルの新モンゴル学園の生徒達と交流をする予定です。そこでは、年間の交流のまとめとして、村から世界へと、諸塚中学校の生徒たちが村から世界へと旅を楽しむと同時に、交流国（モンゴル）の生徒たちに、日本への夢や希望を与える諸塚中学校の生徒たちになってほしいとの願いもあります。交流国（モンゴル）の生徒達に「モンゴルから日本への旅をしよう」を日本の楽しさを伝えられる日本文化や伝統を伝えていく真のグローバルな交流会にしていきたいと考えています。それこそが、お互いの国や文化を理解し、尊重し、新しい世界を創っている国際理解教育であり、「共創」であると考えます。

【資料 1】

令和 6 年度国際理解・交流計画【スリランカ・モンゴル・オーストラリア】(案)

英語科 夏井ひとみ

1 ねらい

英語によるコミュニケーション力、国際理解・異文化理解力、ICT スキルを高める。

2 日時・交流校

	スリランカ	モンゴル	オーストラリア
交流日	10月2日(水)	10月24日(木)	10月30日(水)
交流時間	5校時 13:45~14:35 (50分)	5校時 14:15~15:05 (50分)	2校時 9:30-10:20(50分)
交流学校	Asoka college	新モンゴル学園	MAROOCHYDORE STAGE HIGH SCHOOL
交流対象 生徒	Grade 7(12歳)6人		
担当職員	Waruni Rajamuni 様 (日本語教師)	キャリア教育センター 国際交流担当 ビルゲー様	Anita 様 (日本語教師)
場所・学年	図書室(1・2年生)	音楽室(全学年)	図書室(全学年)

3 当日の授業流れ【zoom での国際理解交流会】

段階(時間)	学習内容及び学習活動	SriLanka	Mongolia	Australia
導入(5)	1 オープニング			
展開前段(5)	2 諸塚中学生によるプレゼンテーション 3 交流国によるプレゼンテーション	1年	1年	1年
		甲斐 川崎	田丸 奈須	山本 吉永
		2年	2年	2年
		甲斐 黒木 黒田 椎葉	中本 西川 二瓶	緬川 山本 若本
		3年	3年	3年
展開後段(3 5)	4 フリートーク (1) 自己紹介 (2) 好きなアニメ (3) 好きな音楽 (4) 有名な食べ物 (5) 自国や交流国について		甲斐 川崎	黒木陽斗 黒木
終末(5)	5 感想共有・写真撮影		佐藤 田吉	奈須 西田 西山

【資料 2】

令和 6 年度国際理解・交流計画【モンゴル】(案)

英語科 夏井ひとみ

1. ねらい

英語によるコミュニケーション力、国際理解・異文化理解力、ICT スキルを高める。

2. 日時・交流校

	モンゴル
交流日	10 月 24 日 (木)
交流時間	5 校時 14:15～15:05 (50 分) 当日 14:00 zoom 入室 アドレスは諸塚から送る
交流学校	新モンゴル学園
交流対象 生徒	中学校 2 年生又は 3 年生 13 歳～15 歳 約 10 人
担当職員	キャリア教育センター 国際交流担当 ビルゲー様
場所・学 年	音楽室 (全学年)

3. 当日の授業流れ【zoom での国際理解交流会】

段階 (時間)	学習内容及び学習活動
導入 (5)	1 オープニング
展開前段 (10)	2 諸塚中学生によるプレゼンテーション (5 分) 3 交流国によるプレゼンテーション (5 分)
展開後段 (30)	4 フリートーク (1) 自己紹介 (2) 好きなアニメ (3) 好きな音楽 (4) 有名な食べ物 (5) 自国や交流国について
終末 (5)	5 クロージング (1) 歌 ① 日本語 ② モンゴル語 ③ 英語 (2) 感想共有・写真撮影

令和 6 年度
International Festival in Morotsuka J.H.S
～村から世界へ～

1 ゴールイメージ

英語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの異文化体験を通して、簡単な異文化についての情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図ることができる。

2 日時

11月7日(木) 午前10時から午後3時05分

講師は、打合せや準備を兼ねて、午前10時に来校する。

3 講師

アメリカ国籍 Evan 講師(音楽文化交流)

エジプト国籍 Mohamed 講師(言語文化交流)

フィリピン国籍 Suico 講師(食文化交流:フィリピンの munchkin 作り)

4 責任者

英語科担当 夏井 ひとみ

5 当日の流れ

3校時:1・3年生英語授業(15名)

4校時:2年生英語授業(11名)

昼休み:全校生徒対象の希望者

6 コース・担当職員・場所

コース	音楽文化	言語文化	食文化
体験国	アメリカ	エジプト	フィリピン
対象学年	全校生徒	全校生徒	全校生徒 (希望者)
場所	英語教室	被服室	調理室
担当職員	夏井	夏井(川越)	夏井

7 (講師) 当日の流れ

時間	内容	備考
10:00～	打合せ・準備	講師来校 英語教室(打合せ)
10:40～11:30(50分)	1・3年生英語授業	英語教室
11:30～11:40(10分)	休憩	
11:40～12:30(50分)	2年生英語授業	
12:30～13:10(40分)	昼食	講師は昼食持参(各教室) 1年生:エバン 2年生:ピリー・モ 3年生:アンジェリカ・スミスさん
13:10～13:40(30分)	食文化体験	調理室
13:40～13:45(5分)	写真撮影	
13:45～13:55(10分)	片付け	
13:55～14:15(20分)	休憩	英語教室
14:15～15:05(50分)	反省会	

【資料 3-2】

8 学習指導過程

段階(時間)	学習内容及び学習活動		資料・準備
前段(10)	1 オープニング (1) 諸塚村・諸塚中学校についてのプレゼンテーション(3年) (2) 日本文化の紹介プレゼンテーション(2年) 2 各講師からの自己紹介と自国紹介		タブレット TV
	音楽交流	言語交流	
中段前半(15)	3 交流曲を歌う	3 アラビア語で名前を書いてもらう。 4 書道文化を紹介し、講師の名前の漢字を書く。	ワークシート ギター 琴 名刺カード 書道用具
中段後半(15)	グループを入れ替える。	グループを入れ替える。	
後段(10分)	5 発表と振り返り (1) 全体合唱 (1) 各グループで学んだことや話したことの共有 (2) 振り返りシート記入 (3) 写真撮影		ワークシート カメラ

(1) 1・3年の授業のプレゼンテーションでは、3年が諸塚や日本のPRショートドラマをする。

(2) 2年の授業のプレゼンテーションでは、音楽の授業で習った琴「さくら」を披露する。

(3) 中段

① 1・3年生

	音楽交流	言語交流
中段前半(15)	1年生	3年生
中段後半(15)	3年生	1年生

② 2年生

	音楽交流	言語交流
中段前半(15)	甲斐 黒木 黒田 中本 西川	二瓶 日吉 緩川 山本 若本 椎葉
中段後半(15)	二瓶 日吉 緩川 山本 若本 椎葉	甲斐 黒木 黒田 中本 西川

(4) アラビア語で名前をカードに書いてもらった後は、カードをラミネートし、ブックマークとして使います。

(5) アラビア語で名前を書いてもらった後、講師の名前を当て字漢字書道で書いてあげる。

1年生…モハメド…茂範明道 エジプト…埃及 諸塚 感謝

2年生…エバン…英絆 アメリカ…亜米利加 諸塚 感謝

3年生…アンジェリカ…杏絵理花 フィリピン…比律賓 諸塚 感謝

9 ルーブリック評価

	異国文化・自国文化理解	言語活用能力 (話すこと・やり取り)
A	他の国々の人々や文化についての多くの適切な知識をもっており、それらの多くを自国文化と比較しながら説明することができる。	日常生活に関する事柄や個人的な関心事(趣味、学校など)について、ある程度準備をすれば会話に参加することができる。
B	他の国々の人々や文化について多くの適切な知識をもっており、それらの一部でも自国文化と比較しながら説明することができる。	ごく身近な話題であれば、基本的な表現を用いて簡単な質疑応答をすることができる。
C	他の国々の人々や文化について説明するには至らず、自国文化においても説明することができない。	相手のサポートがあっても、個人的な関心事(趣味、学校など)についての質問に答えることができない。 日常の挨拶をしたり、挨拶に回答したりすることができない。

10 その他

- (1) 食文化のグループ役割・・・①ビスケットを粉にする
②・・・粉を練乳と混ぜる
③・・・マシュマロをカットする
④・・・トッピングの準備をする
⑤・・・全員で好きなトッピングをする
- (2) 準備物・・・大きめのボール スプーン プラスチック手袋 ビスケットを砕く用の棒
ビニール袋、銀紙入れるもの
- (3) 材料・・・ビスケット、練乳、マシュマロ、トッピング(粉ココナッツ)
- (4) 調理の時はゴム手袋をする。
- (5) 習字道具は、3年生の道具を使用する。3年生は、授業前に被服室で準備をすること。
片付けは、2年生がし、3年生に返すこと。
- (6) 片付けは調理室、被服室を中心にする。授業内、昼休み内にできない時は、放課後にする。
- (7) 英語キャプテンと英語係を中心に動くこと。ただし、1年生は、学習委員長と英語係を中心とする。
- (8) お礼は、生徒感想レポートと動画を送ることとする。
- (9) ネームカードのデザインは、生徒(二瓶さん)がデザインを担当した。

【資料 4】

第1学年・第2学年英語科授業
「世界で活躍する日本人の国際協力」の講話実施計画（案）

「つながる」から「共創」へ

令和6年10月9日（水）

- 1 ねらい 国際的な視野に立ち、世界を見つめ、平和と幸福に貢献する心情を養う
【内容項目 4－（10）世界の中の日本人】
- 2 日時 令和6年12月12日（木）2校時 午前9時40分から午前10時30分
- 3 場所 諸塚中学校 図書室
- 4 対象生徒 第1学年 6名
第2学年11名 計17名
- 5 講師 JICA 海外協力隊 モンゴル日本病院 2023-2 次隊栄養士 土居陽菜 様

6 学習内容

時間	学習内容	備考
前段（10分）	1 自己紹介 名前や出身、職種説明 2 モンゴルと勤務先の紹介 クイズ形式	TV パソコン
中段（35分）	3 JICA 海外協力隊応募のきっかけ （1）JICA 海外協力隊の説明 （2）応募のきっかけ （3）海外生活や仕事での苦楽 （4）やりがい 4 質疑応答	ワークシート
後段（5分）	5 中学生へのメッセージ	

7 その他

英語の授業では、モンゴルの新モンゴル学園と Zoom でつながり、現地の生徒と英会話交流をしている。モンゴルで働いている『「世界で活躍する日本人の国際協力」～「つながる」から「共創」へ～』と題した講話のキャリア教育にしたい。講話は、更に、国際的な視野を持たせ、英語学習への楽しさや世界の中でどう生きていくか、共創を意識していくことに気づかせたいと考える。

【資料 5】

4 人権教育におけるカリキュラム・マネジメント【学級活動、道徳、国際理解教育の時間を軸とした横断的な指導計画(案)】

実施 時期	テーマ	学級活動		道徳の時間		国際理解教育 (道徳の時間)		英語科授業
6月	男女 共同 参画	6月3日(月) 4校時		6月5日(水) 4校時		6月26日(水) 5校時		6月19日(水) 5校時 ミャンマー
		1年	⑩男女が協働する社会	1年	⑥魚の涙	全 学年	多文化共生の世界 (JICAと協働)	WORLD CAFE (食)
		2年	⑨共生社会形成のため に	2年	⑦明日、みんなで暮よう			
		3年	⑥男女が協働する社会	3年	⑦小さな出来事			
7月	いのち の 尊さ			1年	生活習慣と病気の関係性	7月17日(水) 4校時		7月17日(水) 5校時 スリランカ
				2年	がんという病気と予防について	全 学年	多文化共生の世界 (JICAと協働)	WORLD CAFE (音楽・アニメ)
				3年	病気とともに生きる			
11月	多様性	1・2年	⑦さまざまな「性」について考えよう	全 学年	LGBTQの講話(外部講師)			International Festival アメリカ エジプト フィリピン
		3年	⑩自分の将来にかかわる性について					
12月	共生	全 学年	外国人労働者による講話 ⑩ともに支え合う「協働」の社会	1年	②やっぱり樹里は	外国人労働者による講話 (1月実施の学級活動を同じとする)		モンゴル在住栄養士 土居保講話
				2・3年	⑩ぼくのお話 あなたの物語			
2月	性			1年	情報への対応			モンゴル交流会 (文化交流のまとめ)
				2年	交際の仕方について考えよう			
				3年	思春期保健福祉学習(住民生活課)			

【資料 6】

村から世界へ

2年A組 5番 名前 西川 由紀

【日本語】

1 世界について思ったこと(交流会を通して思ったことなど)

正確に話さなくても、単語だけでもある程度伝わるからいいので、
とりあえず何の言葉でもかまわないと思った。それと、インド?アフリカ?は
どうも語のばいがかたがたが、それは、まだよくわからないことだ。
(日本語に対して)

2 日本について思ったこと(日本の良さや気づきなど)

今日、マンチキンというお菓子を食べて、おいしかったけど、結構砂糖が
あり量を食べてしまったので、やはり砂糖が(甘い)
かんた(ん)は食べて、胃がたれないので、それ以外かなと思った。

3 自分自身について(気付いたこと、未来に向けての夢、どう生きたいか、など)

英語は苦手だし、あまり好きではないが、これから生活するために、外国
人と関わりが深くなっていくと思うので、ある程度話せるようにしたい。
に、元々張礼はいいなと思っています。

【英語】(1年生:2文以上 2年生:3文以上 3年生:4文以上)

I learned Philippines' famous sweets are in munckins.
Munckins are very sweet and delicious. I think so.
One Munckin is enough. Because, it's too sweet.

Very good answer
Good job

村から世界へ

3年A組 3番 名前 川崎 菜菜

【日本語】

1 世界について思ったこと(交流会を通して思ったことなど)

言語や文化は違っても、習慣や、考え方、価値観という共通点があるから、
70代くらいの人と話せるようになった。世界は、とても広いけれど、
みんな同じで、自分に勝つことも愛することだ。また、自分の力で相手の
国の言葉や文化を、理解する。話せるようになった。また、自分から積極的に
話せるようになった。

2 日本について思ったこと(日本の良さや気づきなど)

日本は、自分から見たら、外国の人から見たら、とても面白い。それは、
かたがた、自分の住んでいる国に誇りを持って、いろいろな人に伝える。
相手の価値観や、考えを理解し、その文化にも、興味が出てきた。国と国
と、そこそこ話せるようになった。

3 自分自身について(気付いたこと、未来に向けての夢、どう生きたいか、など)

交流の回数が増えるので、習う言葉も増えていくので、聞き取りも多くな
るから、その可能性を高くしていきたい。自分も、自信を持って、
でも、おなかを壊すことがないように、自分でも、1日に1回、
おなかを壊さないように、おなかを壊さないように、
おなかを壊さないように、おなかを壊さないように、

【英語】(1年生:2文以上 2年生:3文以上 3年生:4文以上)

I learned that many countries have different culture and languages. So, I think
it's important because we can have new opinion. It will be happy for anyone
all over the world. I'm glad that it will come true. Also, I want to try
to speak many countries people. I want to get good life!!

村から世界へ

2年A組2番 名前 奥木 達馬

【日本語】

1 世界について思ったこと（交流会を通して思ったことなど）

世界にはいろんな人が いろんな人 と思いました。
世界などでは 日本と違って いろんな人
字は違ふ 人な 感動しました。交流会の 思いを忘れ
ることがない 思い出です。

2 日本について思ったこと（日本の良さや気づきなど）

昼休み、プレゼンテーションの マンチキンを 食べて 食べた ことに 満足
甘くて、世界から見たら、日本の 餅、スライム（和菓子、ようかん）
など は 甘くなく、いい こと 気づきました。

3 自分自身について（気付いたこと、未来に向けての夢、どう生きたいか、など）

私は 初対面の 人と 上手に しゃべることが なくて、今回の 交流
会で 外国の 人は、僕らと 初対面の 人に どう とうと 明るく
接してくれて、とても 格好いい 人 と思いました。

【英語】（1年生：2文以上 2年生：3文以上 3年生：4文以上）

I made munchkins.
It is very sweet.
I like it.

村から世界へ

2年A組7番 名前 中井 海羽

【日本語】

1 世界について思ったこと（交流会を通して思ったことなど）

カンパネーロは 日本以外の 国にも 歌われている。
習字を 本番で 書いた。クリスマス や 誕生日 などの イベント
では、マンチキンを 作って 食べる。プレゼンでは
日本語を 勉強している 人が 多い。

2 日本について思ったこと（日本の良さや気づきなど）

宗教関係は 江戸時代 以来 厳格に 守られて いたのだと、
イスラムや キリスト教 などの 宗教が 守られて いる...
と 感じました。 仏教も 守られて いる。
感謝して います。

3 自分自身について（気付いたこと、未来に向けての夢、どう生きたいか、など）

習字を書いて、プレゼンすると、「上手!! ありがとう。」と 褒められました。
そう言ってくれたので、これから 習字を 頑張ります。
いつかは 外国人や 子供に 教える 先生 になりたい
です。英語を 話せる ように したいです。

【英語】（1年生：2文以上 2年生：3文以上 3年生：4文以上）

I learned that writing arabic is difficult.
Munchkin was delicious.
I want to make munchkin at home.
I enjoyed it!!!!

村から世界へ

2年A組7番 名前 日高 瑛菜

【日本語】

1 世界について思ったこと（交流会を通して思ったことなど）

交流会を通して、アラビア語で書いたときの自分の名前、
プレゼンのお菓子「マンチキン」の作り方を 知ることができました。
アラビア語は、書くのも読むのも 難しいと感じました。マンチ
キンでは、ビスケットに練乳をかけるという考えは 初めての 新しい発見を
しました。

2 日本について思ったこと（日本の良さや気づきなど）

漢字を毛筆で書いたときに、「書写は芸術のようです。」と
おっしゃる方が、確かに そう 感じました。新しく、日本の 良さ
を見つけることも できました。日本人にとっては 普通のこと なのに、
1人で「美しい」や「芸術のよう」と言ってくれる、それは 嬉しいです。

3 自分自身について（気付いたこと、未来に向けての夢、どう生きたいか、など）

私は、交流会を通して 色々な 国の 言語や お菓子などの 文化に
触れることが できて 楽しい 思い出 になりました。これから、色々な 国の
文化に 触れて いきたいです。また、色々な 国の 文化を 知ることが
多様性を 認めて 生きたいです。

【英語】（1年生：2文以上 2年生：3文以上 3年生：4文以上）

I learned how to make Munchikin. It's very
sweet and delicious. I know a new sweets recipe.
I want to make it once again.

「世界はどのような仕組みになっているのか」 構造物の設計は環境に左右される

丸谷 美寧

私立九州ルーテル学院インターナショナル小学部

■教科・科目:UOI-J Unit of Inquiry in Japanese 科 ■対象学年(人数):2年生(3名)
■実践年月日・期間(時数):2024年9月3日～10月4日(15時間)

【実施概要】

1. 単元名（活動名）：「世界はどのような仕組みになっているのか」 構造物の設計は環境に左右される					
2. 実践する教科・領域：UOI-J (Unit of Inquiry in Japanese)	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）： 「構造物の設計は環境に左右される」 ・ 構造物を建築する際に考慮すべき事項（機能） ・ 建築物や構造物が環境に与える影響（変化） ・ 地域社会のニーズと素材の入手可能性が建築に与える影響（つながり） ※（ ）内は、生徒への理解を促す重要概念					
5. 単元の評価規準	①知識及び技能	構造物の設計や周りの環境に左右されることを理解している。			
	②思考力、判断力、表現力等	モンゴルの環境から、ゲルの機能を考えることができる。			
	③学びに向かう力	モンゴルの環境から、ゲルの機能を考えようとすることができる。			
6. 単元設定の理由・単元の意義 (児童 / 生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由あるいは単元の意義】 生活環境によって建築と構造に違いがあることを理解する。このことで、教科の枠を超えた概念理解を深めることができる。 【児童／生徒観】 授業への集中力には個人差があるが、自発的に発言することができ、探究学習に意欲的に取り組む。お互いの得意なことを理解しあい、協働作業をすることができる。				

【教材観】

約5週間にわたる、学校全体の探究テーマは「世界はどのような仕組みになっているのか」である。自然界とその法則について、自然界（物理学のおよび生物学的な）と人間社会のかかわり、科学の原理について理解したことを人間がどのように利用しているか、科学的・技術的な発展が社会と環境に与える影響に関する探究を行う。2年生は建物とその設計の観点からテーマの探究を進めていく。

【教材観】

生徒たちは、昨年度からバングラデシュ、ミャンマー、スリランカなどのアジア国と交流し、英語を中心に多言語文化交流を図っている。モンゴルとの交流も、英語、日本語、モンゴル語と多言語文化での交流を深めていきたい。

【指導観】

U0I-Jは、本校で実施されている3割の日本語での授業のうちのひとつだ。日本語母語話者たちには、多くの発問をすることで、日本語を用いた思考力と表現力の向上を促している。国際バカロレア教育の立場から、内容以上に平和な世界を築くことに貢献する国際的な視野と、それを実現する姿勢を持った学習者の育成が望まれる。Culture Festivalに向け、各国の様子をもっと身近に、より具体的に考えさせたい。

7. 単元計画（全15時間）

時	ねらい	学習活動	資料等
1-2	[Tuning In] 生徒たちの学習意欲を刺激する 事前知識を引き出す	●「三匹の子豚」動画視聴 ●素材の意味を確認 ●部屋にあるもので狼に襲われない家を作ろう ●自分の家の絵を描こう ●家を立てるのに必要なものって ●新聞とビニール袋でつくる家	
	[Finding Out] 言葉の意味を理解する 探究したい自らの問いを出す	● Word Mapで環境の単語理解 ●世界の家を見てみよう各国の写真を見て、気づいたことや不思議に思ったことを書き出す 思考ルーチン「See Think Wonder」	
本時	[Sorting Out] 素材それぞれの特性を知る 土地にあった家の工夫があることに気づく	思考ルーチン「Think1 Think2」 思考ルーチン「I used to... Now that」	

3	[Going Further] どのような環境要因がその建物に影響を与えているか分析する	●時代とともに変化した家 縄文時代の竪穴式住居 サザエさん・ちびまる子ちゃん ●災害に合わせて進化した家 ジェンガで耐震 身の回りにあるもので耐震構造を作ってみよう 丈夫なお菓子の家の作り方	
4-5	[Making Conclusion/ Taking Action/ Reflection]	●実際の家の建築手順を知る ●与えられた条件と素材を用いて、より頑丈な模型を立てる →子どもたち全員で選んだ、警察署を作成	

8. 本時の展開（概略） 本時のねらい：			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	1. 「モンゴルに行ってきたよ！」 「モンゴルってどんな場所だと思う？」 資料①の I used to think の部分に生徒各自が書き出す クラス全体に対して、「モンゴル」を中心に、教師が資料②を作成 生徒の意見を付け足していく。 資料③を読む前に、②に環境・家の吹き出しを付け足す	事前知識の確認	熊本日日新聞教師海外研修記事・写真 ①生徒各自に配布した「I used to think… Now that」ワークシート ②クラス全体のマインドマップ
展開 (25分)	「草原ではどんな家に住んでいるかな？」 2. 調査 ③を音読し、新しく得た情報を生徒に尋ね、②に色を変えて教師が書き込んでいく。	重要語彙の確認 環境・災害（事前の Word Map を参照）	③新しい国語三下（東京書籍）「人をつつむ家ー世界の家めぐり」

展開 (25 分)	「どうしてこの設計になったんだろう？」 「遊牧民は周りにあるどんな素材を使っている？」 以下の質問から気になるものを、モンゴルのゲルの視点から調べる - 構造物を建築する際に考慮すべき事項（機能） - 建築物や構造物が環境に与える影響（変化） - 地域社会のニーズと素材の入手可能性が建築に与える影響（つながり）	単元目標である重要概念の視点で、個人で興味を持った問いに対して調べ学習を行う	研修のお土産 ゲルの中がわかる模型 実際の羊毛を使った、羊の置物
まとめ (10 分)	生徒はわかったことを①の Now that 部分書き込んでいく 生徒は調べてわかったことを発表する。 教師は②に記入		
9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法） ワークシートへの書き込みや授業内での発言を通して、モンゴル国、特に環境とゲルについての理解の深まりをみる。			
10. 学習方法および外部との連携 資料①資料②ともに、授業中での思考の変化を学習者自身が見とるためのアクティビティだ。 ①の「I used to think… Now that」は主に振り返りで使用される。前半「今まではこう思っていた」と後半「今はこう思う」の2つの欄がある。一度に2つを埋めてしまうよりも、後半の欄はアクティビティやペアワークなど新情報に触れた後だとより詳細に子どもたちが記録できる。 ②のマインドマップは思考の発散を促し、アイディア同士の繋がりを見ることができ。追加の情報を色分けするとより思考の変化が視覚的に伝わりやすい。クラス全体で共有することで、協働することで知識が深まるという雰囲気の醸造にも繋げたい。			
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み ●子どもたちがモンゴルの方々に宛てて書いた手紙を届けたことを報告 ●事前に図書コーナーにモンゴルスペースの作成した。お土産やポスターなどを掲示する。 ●保護者も参加する、11月の校内文化祭でのモンゴルスペースを設置。当時は研修で知り合った方からモンゴルの民族衣装や品物をお借りした。 ●校内連絡媒体で教師海外研修の写真や研修のポスターの告知をポスト ●蔦屋書店熊本三年坂店にて、熊本市教育委員会主催パネル展示2日間			

【自己評価】

12. 成果	現地では、普段では買わないお土産も、子どもたちに良い教材になる と思い、手に触れて楽しめる、ということを重点に集めたので、この 授業に限らず、校内でも活用することができました。また、授業づく りにおいて、あえてモンゴルを教材として選ぶ、という姿勢が取れる ようになりました。
13. 課題	他の学年の授業では、探求テーマから考えた時に、モンゴルの授業を 一回きりで終わらせてしまったことが、モンゴルを題材として異文 化理解が目的の文化紹介であれば単発で入れ込むことは簡単ですが、 もっと国を身近に感じてもらうためには、数時間を使って、モンゴル が持つ課題や比較を行い思考する教室を実現したいと思いました。
14. 改善点	熊本県国際協力推進員と協力して、実際にモンゴル出身の方との交流 と繋げたかった。実際、モンゴルでは日常生活にゲルがどのようにま たどの程度関わっているのか、取材をすることで、家の使用感なども 知ることができただろう。また、この単元では、「行動する」の部分 がクラス内での工作に終始したので、次の単元では生徒たちが、環境 ポスター作成して学校関係者に配りました。
15. 学びの軌跡 (児童生徒 の反応、感 想文、作文、 ノートなど)	「モンゴル？知らない。聞いたことはある。」「モンゴルって暑い国で しょ？」 (モンゴル伝統の占い道具、シャガイを見て)「これは動物の歯かな？」 「もしかして、ゲルの材料は動物の骨じゃない？」「ゲルの真ん中に火 があるね。」(授業後、全員から)「モンゴル行ってみたい！」
16. 授業者によ る自由記述	国際バカロレア教育の哲学も、その多くを国際理解教育に根ざしてい ることを改めて自覚することができました。 熊本日日新聞さんに連載していただいたことで、キャンパス内外、複 数名の地域の方に声をかけていただきました。

参考資料：

「PYPの作り方」

<https://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/pyp-making-the-pyp-happen-jp.pdf>

PZ's Thinking Routines Toolbox (Harverd graduate school of education)

<https://pz.harvard.edu/thinking-routines>

「人をつつむ家ー世界の家めぐり」新しい国語三下（東京書籍）

<https://www.youtube.com/watch?v=lgdn3GkU7Bc>

「世界のいろいろな家を見てみよう！」ABC Housing

<https://abc-housing.asahi.co.jp/sumai/kyokasho/kyokasho03.html>

日本各地の住まいの例」教育図書

https://www.kyoiku-tosho.co.jp/junior-hs/support/slide/kslide_24.html

ジェンダーギャップについて考えよう

瓜生 真弓

飯塚市立穂波東中学校

■教科・科目：道徳 ■対象学年（人数）：3年生（35名）

■実践年月日・期間（時数）：2024年10月～11月（2時間）

【実施概要】

1. 単元名（活動名）：ジェンダーギャップについて考えよう					
2. 実践する教科・領域：道徳	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）： ○ジェンダーバイアスについて知る。 ○世界における日本のジェンダーギャップの現状について知る。 ○日本のジェンダーギャップの課題を「ジブンゴト」としてとらえ、性別にとらわれることなく、今後の進路を選択できる。					
5. 単元の評価規準	①知識及び技能	ジェンダーギャップという言葉について理解する。			
	②思考力、判断力、表現力等	世界と日本を比較してジェンダーギャップについて考えることができる。 ジェンダーギャップ解消に向けて、意見を出せる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	ジェンダーギャップを解消するために、自分にできることは何か、考えを持つことができる。			
6. 単元設定の理由・単元の意義 (児童 / 生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由あるいは単元の意義】 世界経済フォーラム（WEF）が発表する 2024 年における日本のジェンダーギャップ指数は 146 カ国中 118 位であり、世界の中で、日本のジェンダーギャップ指数は低値であるという現状がある。特に、主要 7 カ国（G7）で最下位であった。ジェンダーギャップ指数とは「各国の男女平等に関する状況を数値化したもの」である。「経済・政治・教育・保健」の 4 分野のスコアをそれぞれ導き出した上で、その平均値がジェンダーギャップ指数となる。日本は経済分野と政治分野のスコアが特に低値となっている。WEF は「現在のペースでは、完全なジェンダー公正を達成するまでにあと 134 年かかる。これは 5 世代分に相当する。」と指摘している。ジェンダーについて学ぶことは SDGs の目標の 1 つである「ジェンダー平等を実現する」を達成するために大変意義深い。				

また、日本のジェンダーギャップがなかなか解消されない理由の1つとして、ジェンダーバイアス（男女の役割を分け、活躍の場を限定する固定概念）が影響していると考えられる。ジェンダーバイアスについて知ること、性別による無意識の差別及び偏見があることに気づかせたい。進路選択の時期にある生徒たちに対し、ジェンダーギャップの問題を「ジブンゴト」として意識させることで、性別にとらわれることなく、それぞれの進路を歩むことができるようにしたい。

【生徒観】

本校は今年度、「女子はスカート、男子はスラックス」を標準とするセーラー服・学ランから、「スカートあるいはスラックスを選択できる」ブレザーの新制服を導入した。それは今年度入学生のみでなく、在校生であっても希望者は新制服を購入できる。学校現場での「無意識の男女わけ」を見直した、転換の時期となっている。

対象学年である3年生は、社会科の授業の中で「男女雇用機会均等法」について学習し、道德の授業の中では「歴史を動かした女性たち」を題材に津田梅子さん、石井筆子さん、マザー・テレサさんについて学んでいる。女性の教育及び社会的地位の向上において、学習している。

【教材観】

授業者がJICA九州教師海外研修でモンゴルを訪問した経験をもとに、ジェンダー平等の視点を以て体感したこと及び現地の学校教員及び生徒等から聴き得たジェンダー観を伝える。日本におけるジェンダーギャップの課題を「ジブンゴト」としてとらえさせることで、生徒たちが性別にとらわれることなく、進路選択ができるようにしたい。

【指導観】

指導にあたっては、第1時においては本校の文化発表会の中で授業者からモンゴルについての食事・風土・文化等を伝えることによって、海外への興味関心を高める。第2時においては授業者がモンゴルを訪問して感じたジェンダー観に触れながら、世界の中で日本を見たときのジェンダーギャップの問題があることを理解させる。ジェンダーギャップを「ジブンゴト」としてとらえさせるために、「ジェンダーギャップがあることで、身近なところにおける影響」を考えさせる。そして、性別にとらわれることなく、それぞれの進路選択ができるようにしたい。

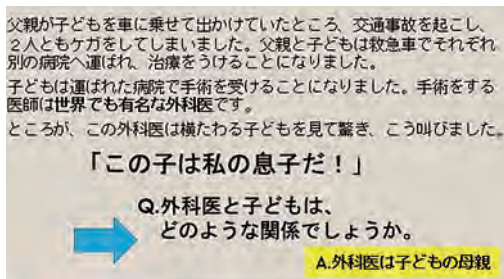
7. 単元計画（全2時間）

時	ねらい	学習活動	資料等
1	○海外についての興味関心を高める。 ○国際理解についての興味関心を高める。	○「世界について考えよう」文化発表会で授業者の体験を聴く。モンゴルについて知る。 ・人口 ・食事 ・文化 ・日本との共通点や相違点 ○国際理解について、授業者の見解を聴く。 ・出会い ・授業者が感じたこと ※全校生徒（325名）を対象とする。	

2 本時	○性別にとらわれず、自分の進路選択ができることに気づく。 ○ジェンダーギャップの問題を「ジブンゴト」として捉えさえる。	○ジェンダーバイアスについて知る。 ○日本のジェンダーギャップ指数が低値であることを知る。 ○モンゴル研修で授業者が体験したことを知り、ジェンダーギャップにおいての日本と他国との違いを知る。	
---------	---	--	--

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：資料を活用して、無意識の差別や偏見があることに気づかせる。ジェンダーギャップの問題を「ジブンゴト」として捉え、性別にとらわれることなく、今後の進路を選択できる。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	(1) 【資料】を電子黒板に写す。 【資料】の内容が理解できたかを確認し、「外科医と子どもはどのような関係なのか」を考えさせる  2) ジェンダーバイアスの説明をする。	まずは個人で考えさせ、その後は隣の席の人と話をさせる。 「父親が2人で子を持つ」という答えもあるが、その場合であると「外科医＝男性」というジェンダーバイアスが存在している。「家族の形の多様性」については今後の学習で取り組んでいくことを伝える。	電子黒板
展開 (30分)	(3) 本時のめあてを確認する。 「ジェンダー平等」の視点で、自分の「これから」について考えよう。 (4) 動画を視聴する。 【SDGs 動画シリーズ ゴール5 ジェンダー平等を実現しよう】 (5) 授業者がモンゴルを訪問したときに感じたことを伝える。 ・モンゴルと日本のトイレの違い・現地の小中高一貫学校の教員の話 ・モンゴルの人たちの【資料】に対する反応	動画を途中で止め、日本のジェンダーギャップ指数を予測させる。 日本とモンゴルのジェンダー面においての違いについて伝える。	モンゴルの写真

まとめ (10分)	(6) 【ワークシート】 ジェンダーギャップについて考えさせる。 ・どのような場面で感じるか。 ・解消のために大切にしたいことは何か。 (8) 本時のふりかえりを行う。 なぜ、今のこの時期にこの学習をしているのか、授業者の思いを伝える。感想を書かせる。	個人で考えさせたあとに班で意見を交流させる。その後、発表させる。あまり意見が出なければ途中で授業者の体験を伝える。 職業選択においては「なぜその仕事を選ぶのか」という自らの意志が大事な要素であることを伝える。	
9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法） 日本におけるジェンダーギャップの問題を「ジブンゴト」として考察できる。 (ワークシート、発言、行動観察)			
10. 学習方法および外部との連携 ・モンゴルの写真を活用する。 ・新モンゴル学園の生徒にアンケート(本時の【資料】でジェンダーに関する問い)を行い、本校の生徒の回答と比較することで、授業に活かす			
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み ・学校内の文化発表会でモンゴルを起点に海外に興味を持たせる発表を行う。 ・飯塚市の適応指導教室でモンゴルについての話をする。 ・飯塚市の中学校のキャリア教育講和の中で、モンゴルについて話をする。 ・筑豊地区国際理解教育研究会の中でモンゴルのことや授業実践について発表する。			

【自己評価】

12. 成果	授業後に「これもジェンダーの問題ですか。」と訊ねてくる生徒が複数名いた。また、保護者から「家庭の中で『女の子なのに』という発言をしたら、子どもからジェンダーギャップについて説明されました。」という話をされた。授業中は生徒から「普段の生活の中でジェンダーの問題を感じることはあまりない。」という発言もあったが、授業をきっかけにジェンダーの問題についての意識が高まり、「ジブンゴト」として感じる生徒が増えたのではないかと考えた。
13. 課題	ジェンダーギャップの問題は国レベルで取り組むべきこと及び個人のレベルで取り組むべきことがあると考え、当初はその両面からジェンダーギャップ解消の方法を考察させようとしていた。しかし、授業の構想をしていく中で、時間的な余裕がないと考え、「個人レベル」に焦点を当てた。「ジェンダーギャップの問題は『ジブンゴト』である」という視点をもたせることをねらいとした。実際に授業をしてみると、ジェンダーギャップの問題として、「国レベル」と「個人レベル」の両方が生徒の意見として挙がった。このことから、「国レベル」の課題から、「よりよい社会の実現に向けた」視点を含めた授業をしていくと、生徒の実践力（行動力）に働きかけることができ、ジェンダーギャップの問題をより深化させられるような展開ができたのではないかとと思う。

14. 改善点

再度授業を実施するならば、原因と追求の過程を意識した授業展開をしていきたい。「そもそも、なぜ日本にジェンダーギャップの問題があるのか」ということを、歴史的な背景及び日本の法律・雇用・社会等のあらゆる面で考察させるところから始めると、より深化した展開ができたのではないかと考える。その上で日本と他国との比較をさせたい。

15. 学びの軌跡
(児童生徒
の反応、感
想文、作文、
ノートな
ど)

<授業の様子>



<授業のワークシート>

○今日の授業で思ったこと・考えたことを書きましょう。

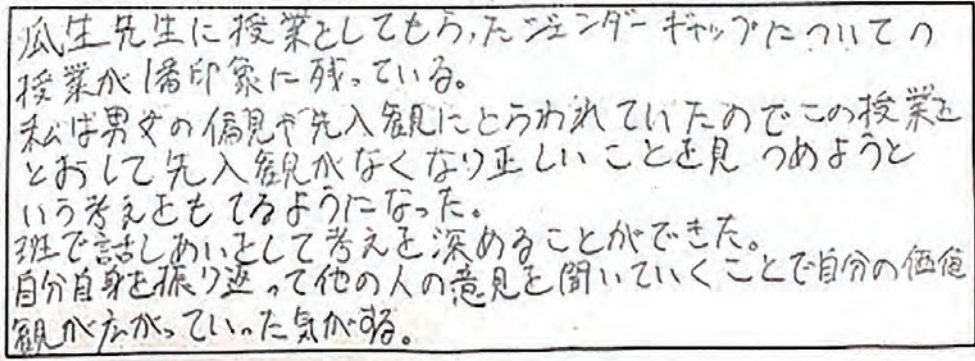
日本が「いい」と下のほうの118位なことが悲しかった。
ジェンダーギャップをなくすためには1人1人の個性を大切に認め合うことが大切だと思った。他にも固定観念にとらわれず自分らしさを大切にみんなが生きていける世界になればいいなと思った。

日本が「いい」と下のほうの118位なことが悲しかった。ジェンダーギャップをなくすためには1人1人の個性を大切に認め合うことが大切だと思った。他にも固定観念にとらわれず自分らしさを大切にみんなが生きていける世界になればいいなと思った。

○今日の授業で思ったこと・考えたことを書きましょう。

始めのストーリーを見たときに、外科医といえば「男」というかっ
てな考えがあったので、自分でびっくりしました。無意識にいろ
いろなことを決めつけてしまっているから考えをかえようと思
いました。私には、可能性無限だいなので、いろいろなことに挑
戦していこうと思いました。みんなで認めあい、自分らしさを大切
に生きていきます!!

始めのストーリーを見たときに、外科医といえば「男」というかっ
てな考えがあったので、自分でびっくりしました。無意識にいろ
いろなことを決めつけてしまっているから考えをかえようと思
いました。私には、可能性無限だいなので、いろいろなことに挑
戦していこうと思いました。みんなで認めあい、自分らしさを大切
に生きていきます!!

	<その他> 今回の授業のワークシートではないが、学期末に実施する「道徳の自己評価」において、多くの生徒がジェンダーギャップについて記入していた。その1部を紹介する。 〇2学期の道徳の授業を振り返って、頑張ったことや成長したこと、印象に残った内容は何か？  瓜生先生に授業としてもらったジェンダーギャップについての授業が一番印象に残っている。 私は男女の偏見や先入観にとらわれていたためこの授業をとおして先入観がなくなり正しいことを見つめようという考えをもてるようになった。 班で話し合いを通して考えを深めることができた。 自分自身を振り返って他の人の意見を聞いていくことで自分の価値観が広がっていた気がする。
16. 授業者による自由記述	本校では、「性に関する指導」の年間カリキュラムに「ジェンダーギャップ」の授業が組み込まれている。昨年度も3年生にジェンダーギャップについての授業を実施した。教師海外研修後に実施した今回の授業では、モンゴルの方々との交流で感じたジェンダー観、環境及び社会問題等の要素を加えることで、昨年度の授業より、私自身の言葉に説得力を持たせることができた実感した。 生徒たちにとって、ジェンダーの不平等は日頃の生活の中であまり感じない問題であるようであった。それは「不平等が存在しない」のではなく、「不平等が当たり前の中で過ぎ去っている」ということを説明した。ジェンダー不平等国とも言える日本で生きているということは、1人1人がこの問題の当事者、つまり「ジブンゴト」であるということ伝えて。モンゴルを起点に、世界のジェンダー問題について伝えることで、「世界から見た日本のジェンダー問題」について考える機会になったと感じている。 養護教諭として、これまで校内において性に関する指導を推進してきた。「自分も他者も認め共生していく力を身につける」という点で、国際理解教育と性に関する指導のつながりを感じた。今後も研究と修養に励んでいきたい。 教師海外研修に参加する貴重な機会を頂いた、JICA九州様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考資料：

JICA 国際協力機構【SDGs 動画シリーズ ゴール5 ジェンダー平等を実現しよう】

日本とモンゴルのちがいをかんじよう

立和田 理恵

福岡県立太宰府特別支援学校

■教科・科目：生活単元学習（外国語・美術・音楽・国語）科 ■対象学年（人数）：訪問
学級2年6組（3名） ■実践年月日・期間（時数）：2024年10月～11月（4時間）

【実施概要】

1. 単元名（活動名）：日本とモンゴルのちがいをかんじよう					
2. 実践する教科・領域：自立活動	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）： ・モンゴルの文化に触れる活動を通して、他国の人々との文化交流体験を行う。日本以外の国に感じ、触れることで、共通点や相違点に気づき、違いをよさとして、受け入れ、視野を広げる。					
5. 単元の評価規準	①知識及び技能	・自分たちの国とそれ以外の国があることを知り、モンゴルについて学習することで世界の国々に興味・関心をもつことができる。			
	②思考力、判断力、表現力等	・モンゴルの国の学習を通して他国と自分の国との生活や文化の違いを考え、自分の考えを表現することができる。			
	③学びに向かう力	・実物に触れ、五感を使って異文化に触れることで、新しい体験や発見をしようとする態度を身に付けることができる。			
6. 単元設定の理由・単元の意義 (児童 / 生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由あるいは単元の意義】 本単元では、モンゴルに関する動画、写真、実物に触れることができる教材を活用する。本単元を通して生徒は、日本以外の国を知り、異国に興味関心をもつことができると考える。また、オイスカモンゴル（ハンドメイド）の方から頂いた羊毛ボールを作品にし、できあがった作品を写真で送るという交流は、人の気持ちに触れたり、心情をはぐくんだりすることへと発展する効果が期待されると考える。				

【児童／生徒観】

生徒は、体の動きに制限があり、目の瞬きやピエゾセンサースイッチを親指と人指し指の間に挟んでスイッチを押したり、視線入力装置を使って、コミュニケーションアプリのアイコンを選択したりして思いや考えを表現する。

そのために、第1次（導入段階）では、五感の一つの視覚を使って、動画で臨場感味わえるようにする。その際、ドローンを使った映像や現地で撮影した動画を使用する。次に第2次（展開段階）では、羊の毛を見て、触って、匂いを嗅いで五感で感じることができるようになる。第3次は音楽や芸術の映像をみる活動を行う。第4次（終末段階）では、オイスカモンゴルでいただいたウールやウール玉を使って作品作りと、お礼の手紙を書くことができるようにする。訪問教育の生徒は、視覚的に見たり、実際に触れたりしながら体験的に学ぶことで理解を深めることができることを考えている。実際のものをできるだけ多く見せたり、触れたりしながら生徒が五感を使って異文化に親しむことができるように設定した。

【指導観】

社会のグローバル化が進み、言語や文化の異なる人々を理解し、協力し合いながら共に生きていくことが重要である。相手の気持ちを汲み取ったり、人の気持ちに触れたり、自分の気持ちを表現し、人とのコミュニケーションをとることは経験が少ない生徒にとって、これから就労に向けて、生きていく上で必要なスキルである。他国を知ることによって自国に対して理解するという相互関係を、身近な関係でも同じであり、互いに支え合えることができるということを目指している。

指導にあたっては、五感を使ってモンゴルを感じとり、更には、オイスカモンゴルの羊毛を使った作品を作ることを通して、他の国の人と交流し、相手の気持ちを考える心情を育てたい。そのために、自分の国と違う国あること、相手がいることを理解するためにモンゴルと日本の違いを見つける活動を設定する。また、人の気持ちに触れたり、心情を育くんだりすることができるように、オイスカモンゴルの方に作品の写真を送るための活動を設定する。

7. 単元計画（全4時間）

時	ねらい	学習活動	資料等
1	1. モンゴルについて知る (1) モンゴルの場所を知る。 2. モンゴルと日本の違いを見つける。 (1) 共通点と相違点を見つける。 ・標識、道路、建物、店、食事、住居、衣服、お金等 (2) 気付いたことをまとめる。	○モンゴルが遠い国であることを知るために Google earth で自宅からモンゴルの距離を確認する。 ○日本とは違うモンゴルという国を知るために、モンゴルにおける様々な実物に触れたり、映像をみたりする。 ○授業をして気が付いたことを教師と一緒にワークシートに書く。	・Google earth ・モンゴルの写真・動画 ・オイスカモンゴルの作品 ・モンゴルの教科書・本 ・モンゴルすごろく

2	1. モンゴルについて知る。 (1) モンゴルと日本を比べながら〇×クイズをする。 ・標識・看板・文字 2. モンゴルと日本の違いを見つけたことを発表する。	○ Google earth で自宅からモンゴルへ飛び、日本と世界を知り、モンゴルが遠い国であることに気づく。 ○ 前時にまとめた気付いたことを、発表する。	・ Google earth ・ モンゴルの写真や動画を PowerPoint で作成した〇×クイズ
3	日本とモンゴルの音楽や踊りに親しむ。 (1) 楽器や踊り、演奏をみる。 ・ 太陽の家の演奏と踊り。 ・ 日本とモンゴルの共通部分を見つけ、親近感を持たせる。 ・ 「幸せなら手をたたこう」	○ 日本とモンゴルの歌を聞く ・ 日本の歌い方モンゴルの歌い方の違いに気付くことができるように、日本の発声とモンゴル（ホーミー）の映像を設定する。 ○ 日本の踊り、モンゴルの踊りを見る。	・ モンゴル「太陽の家」の動画 ・ 写真 ・ ホーミー動画 ・ モンゴル「馬乳酒を販売している親子の歌」 ・ 馬乳酒の作り方の動画
4 本時	1. ウールボールで作品を作る。 (1) 作品例から作りたいものを選ぶ。 ・ ヘアゴム・キーホルダー等 (2) 作品づくり	○ 選択するためにピエゾセンサースイッチを使ったり、ドロップトークを使ったりする。 ○ 羊毛を頂いた Ninjin Iris さんの写真やオイスカモンゴルの写真を提示する。	・ ピエゾセンサー ・ ドロップトーク ・ オイスカモンゴルの動画・写真 ・ Ninjin Iris さんの写真

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：○モンゴルと日本の違いの相違点を知り、手紙・作品作りを通して人の気持ちに触れたり、心情を育んだりすることができる。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (10分)	1 Google earth や動画でモンゴルを体験する。 (1) 日本とモンゴルの街並みや風景の様子をみる。 (2) 日本とモンゴルの違いについてのクイズに取り組む。	・ モンゴルと日本の道路や建物、風景の違いに気付く。 ・ 前時で学習したことを確認するために〇×クイズをする。	・ ドローン映像 ・ 道路の標識 ・ 車、店の映像

展開 (30 分)	2 羊毛で作品を作る (1) 羊毛の作品や羊毛を見て、触って、匂って充分感じる。 (2) 数個の作品の中どの作品を作るかを決める。 ・色を決める。 ・形や大きさを決める。 (3) 作品を教師と一緒に作る	・モンゴルの方と手紙 ・作品交流するために、作品を作ることを伝える。 ・作品を作るために映像で見た動物の毛であることを伝え、五感を使って羊毛を十分に触れて作成する。	・オイスカモンゴルの羊毛と作品 ・作品の写真 ・パワーポイントで選択肢を準備する。 ・iPad とピエゾセンサー。 ・Google 翻訳
まとめ (5 分)	3 学習を振り返る。 (1) ○○をがんばった。もっとしたかったなど具体的に頑張ったことを伝える。	・数個の言葉の選択肢をあたえて生徒が選ぶ。	
9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法） ・モンゴルについて興味・関心をもつことができたか。（開眼時間、心拍（パルスオキシメーター） ・他国と自分の国との生活や文化の違いを考え、自分の考えを表現することができたか。（瞬き、視線入力装置での文字、選択、ポインターでのポイント） ・実物に触れ、五感を使うことで、新しい体験や発見をしようとする姿勢があったか。（瞬き、表情）			
10. 学習方法および外部との連携 オイスカモンゴルの方から頂いた羊毛と、ウールボールを使って作品を作る。			
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み 多くの児童生徒が利用する「自立活動室」の向かいの教材室の一部のスペースに作品やモンゴルの教科書、地図を掲示し、見たり触れたりできるように常時展示しておく。			

【自己評価】

12. 成果	○認知力の向上 どの生徒も、音楽や動画、体験を取り入れたことで目を大きく開いて授業に取り組んだ。なかでも、モンゴルの音楽や踊りに強く興味を示した。特に、モンゴルの発声法や音声で家畜を呼ぶ音楽「ホーミー」や、手や腕を大きく使った独特な動きのある踊りに興味を示した。 ○社会性の育成 ある生徒はモンゴル語に興味をもち、モンゴル語の音声を目を大きく開いて聞いていた。また、日本では見られない広大な草原、羊や馬などの様子をじっと見る様子も見られた。別の生徒は羊を見て、「羊を知っている」というように、YouTube でメリーさんの羊を流して、教師に共感と理解を図ろうとする様子が見られた。
13. 課題	羊毛を使った作品づくりを本時にしたが、作るよりも、モンゴルの様子を見たり、触れたりすることに興味をもっていたので、時間の配分を考えて内容を深めていったほうがよかった。

14. 改善点

○興味に基づく教材の選択

外国の文化に触れる経験が少ないため、興味が限定的な生徒に対しては、興味に合ったテーマや題材を用いると、学習意欲が向上しやすかった。羊毛に触れて作品を作るときに「メリーさんの羊」の音楽を導入に使用したり、モンゴルの音楽をBGMに流し授業を行ったりすることは、作品づくりの手助けになった。

15. 学びの軌跡

(児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)

2 時間目

①日本とモンゴルの違いをクイズにする

②違いを発表する
(表出できない生徒は「はい」「いいえ」がわかる問をする)



おうだんぼどう

標識の同じところ、違うところ。



うさぎのけ ひつじのけ

なんの毛でしょうか



「け」をさわってみて どうおもいましたか

簡単な操作
一目でわかる振り
返り

3 時間目

①楽器や踊り、演奏をみる。

②日本とモンゴルの同じを見つけ、親近感を持たせる。



モンゴルのたいようのいえの動画



ホーミー 動画
歌い方の違いに
気付く



日本の踊り、モンゴルの踊りを見る。

<触って体験する>

- ・羊の毛を刈り、毛を洗って乾かして、製品にしていく様子を見せた。
- ・ピエゾセンサーや視線入力装置を活用し PowerPoint を使い、操作することができるようにした。2 択の問題で、どちらかを瞬きをして答える。



みて、さわってください。
なんの「け」でしょうか



うさぎのけ ひつじのけ

触った感触を選択肢の中から近いものを答える。



毛(け)をさわってみて
どうおもいましたか



<音楽や踊りの感想>

衣装と踊りの様子を
目を大きく開いて見ていた。

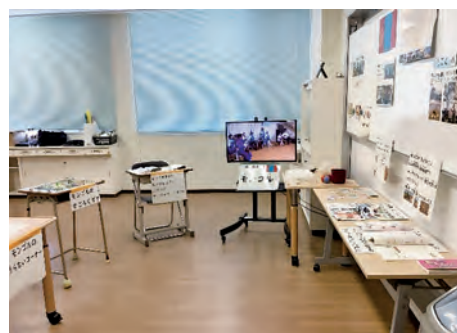


16. 授業者
による自
由記述

学校生活の中で自然に意識づけ、目に触れる廊下や教材室の一部に「国際理解教育」という言葉と展示物をして、いつでも出入りできるようにしました。

～展示品～

- ・モンゴルのお金・モンゴルの羊毛・羊毛製品
- ・モンゴルの算数教科書2年生（日本の2年生と比較展示）
- ・モンゴルの幼児向け道徳の本・モンゴルの文字にチャレンジしよう
- ・モンゴルの占い・モンゴルのすごろく等



4 編 宇宙や地球の科学

2 章 自然景観と自然災害

大町 淳 長崎県立島原工業高等学校

■教科・科目：理科（科学と人間生活）科 ■対象学年（人数）：1年K組（37名）

■実践年月日・期間（時数）：2024年10月17日（1時間）

【実施概要】

1. 単元名（活動名）：4 編 宇宙や地球の科学 2 章 自然景観と自然災害					
2. 実践する教科・領域： 理科（科学と人間生活）（地学分野）	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）： 被災後の自助・共助・公助および災害に強い住宅について考える。 日本の建築基準法を満たさない他国の住宅を教材に、災害との関りを考える。 多文化理解を深め、防災意識を高める。					
5. 単元の評価規準	①知識及び技能	・本時は評価しない。			
	②思考力、判断力、表現力等	・ティピーやゲルの構造の想像図を描ける			
	③学びに向かう力	・災害関連死およびゲルの特徴を考察する			
6. 単元設定の理由・単元の意義 （児童／生徒観、教材観、指導観）	【単元設定の理由あるいは単元の意義】 国内の災害関連死をふまえ、自助・共助・公助の現状や問題点について考える。また、災害に強い住宅の一例として、ゲルを紹介する。ゲルには、国内の建築物とは異なる特徴がある。その特徴を元に、建築に関わる科学リテラシーを深める				
	【児童／生徒観】 工業高等学校・建築技術科の生徒である。将来、建築や建設に関わる就職を目指している。そのため、災害復旧や復興に関わる可能性がある。また、災害発生時の自助・共助の即戦力になることも期待される。				
	【教材観】 設定した科目の単元は、既定の学習を終了している。本時の学習では、被災後の対応に着目し、その例について考える。他国の例も参考とし、多文化理解の一助とする。				
	【指導観】 本時は、自由な発想や興味関心を伸ばすことに重点が置かれる。その一方で、国際理解やふるさと教育にも関連付ける。				

7. 単元計画（全 11 時間）

時	ねらい	学習活動	資料等
1～10	自然景観と自然災害に関する観察などを行い、身近な自然景観の成り立ちと自然災害について、人間生活と関連付けて理解する。		
11 本時	災害対策のうち、災害関連死を防ぐ方法を模索する。その際、他国の住宅等を参考にする。また、ゲルの特徴を理解する。	ティピーやゲルの構造を想像し、図に示す。さらに、それらの特徴について考察する	

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：災害関連死を減らす方法を模索する。特にモンゴルの住居（ゲル）を参考にする。また、ゲルの特徴的な構造を理解する。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	○モンゴルの基本情報 特に 人口密度・人口集中 パワーポイント①表紙  ・首都への人口集中とソド（冷害） 比較的に死者数が少ない	日本（特に地元）と対比し、感覚的な理解を促す。	パワーポイント①～③ パワーポイント②人口密度・人口集中 モンゴルに行ってきた。 首都：ウランバートル 170万人 (福岡市・熊本県と同程度) 全国民の半分。  モンゴルの面積 日本の4倍 人口密度が低い（世界一） 2人/1km² 島工の敷地に0.1人 パワーポイント③ソド なぜ、首都ウランバートルに人口が集中するのか。 モンゴルの冷害：ソド 夏の干ばつ＋冬の豪雪・極寒 2024年のソド 被災：72万5千人 死者：13人 家畜：480万頭 近年、頻発傾向 様々な原因はあるが、 移住という避難生活 日本が学ぶべきことは？ 

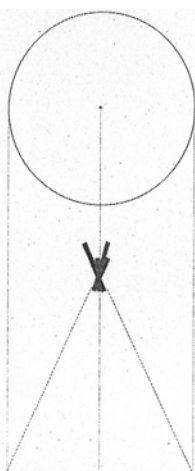
展開 (35分)	○日本の災害における災害関連死 (直接死との比較)	パワーポイント④	パワーポイント④日本の災害 ○災害関連死：避難生活などの影響で亡くなること <table><tr><th>発生日</th><th>災害</th><th>直接死</th><th>災害関連死</th><th>計</th></tr><tr><td>2011年</td><td>東日本大震災</td><td>15900人 (2520人)(行方不明)</td><td>3794人</td><td>19694人 (22214人)</td></tr><tr><td>2016年</td><td>熊本地震</td><td>50人</td><td>220人</td><td>270人</td></tr><tr><td>2024年</td><td>能登半島地震</td><td>227人</td><td>170人</td><td>397人</td></tr></table> ○原因 ・避難生活による肉体的、精神的ストレス ・不衛生な環境による体調の悪化 ・栄養不足や食欲不振による衰弱 ・処方箋が摂取できなかったことによる持病の悪化 ・車中泊中のエコノミークラス症候群の発生 ・将来を悲観した自殺 ・仮設住宅での孤独感による過度の飲酒 ・災害復旧作業中の過労	発生日	災害	直接死	災害関連死	計	2011年	東日本大震災	15900人 (2520人) (行方不明)	3794人	19694人 (22214人)	2016年	熊本地震	50人	220人	270人	2024年	能登半島地震	227人	170人	397人
	発生日	災害	直接死	災害関連死	計																		
	2011年	東日本大震災	15900人 (2520人) (行方不明)	3794人	19694人 (22214人)																		
	2016年	熊本地震	50人	220人	270人																		
2024年	能登半島地震	227人	170人	397人																			
○減災のヒント	パワーポイント⑤～⑦ プリント No.1 (図1) 模型① (ティピーの構造)																						
・ 共助の例 (能登半島・ビニールハウス避難) 公助より共助を選択	パワーポイント⑤ビニールハウス ビニールハウス避難生活 能登半島地震で、見られた共助の例 ・ 避難所は過密 ・ 感染症や犯罪の心配 ・ 自宅近くのメリット ・ 地域の団結力 ⇒ 避難所よりマシと判断 より良い避難生活の知恵を！ ・ 他所から学ぶ ・ 過去から学ぶ																						
・ 公助の例 (イタリア) 日本より対策が進んでいる	地域の連携 パワーポイント⑥イタリア イタリア 避難所の先進地 国の機関「市民保護局」 ○充実した設備 (国の備蓄分) ・ 避難所用資材 2万人分 テント・簡易ベット トイレ・シャワー用コンテナ 調理用コンテナ 給水車・発電機 ○訓練を受けたボランティア ・ 30万人 (事前訓練・登録) プロもボランティア参加 移動費は国が負担 企業には金銭的補助 (社員の参加に対して) ○組織のガイドライン作成 消防・軍・ボランティア団体等																						
	建築関係者等のボランティア参加が容易な制度																						

・ 自助の例（ティピー）

ティピーの構造を想像し図示する。

プリント No. 1 図 1

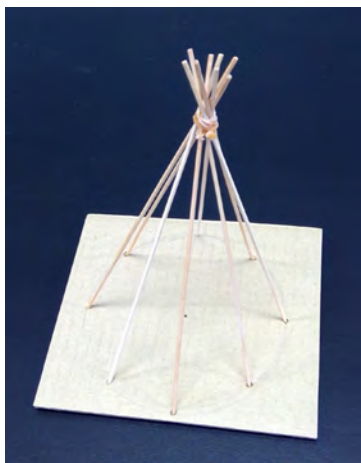
図 1



議論（隣席の生徒と）

答合わせ

模型①ティピー



パワーポイント⑦ティピー

アメリカインディアンのティピー



・ 夏の野営用の住居
・ 中で火を焚ける

問 どのような構造？

プリントの図 1 に記入

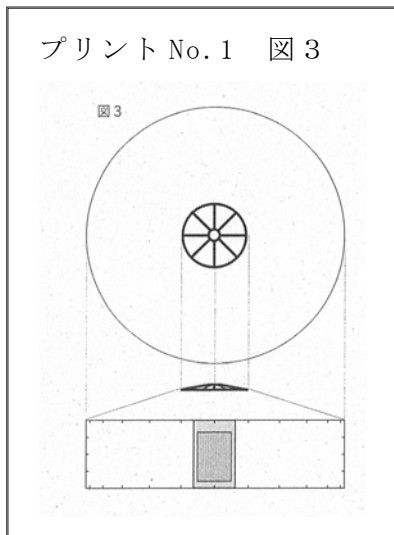
各自プリントに記入。

互いに図を比較

身近な材料で設営可能。

- ・ 減災につながる生活様式（遊牧とゲル）

ゲルの構造を想像し図示する。



まとめ
(10分)

議論（隣席の生徒と）

答え合わせ

模型②ゲル（構造）



模型③ゲル（部材）



パワーポイント⑧・⑨
プリント No. 1 (図 1)
模型②ゲル

模型②ゲル（天幕付き）



パワーポイント⑧ゲル

モンゴルのゲル



- ・ 現在でも使用
（アジアの草原地帯）
（数千年の歴史）
- ・ 大人2人で、1時間半で設営
（組み立て式）
- ・ 中で火を焚ける
- ・ 地面に固定しない自立式

問 どのような構造？
プリントの図3に記入

互いに図を比較

パワーポイント⑨ゲルの内部

ゲルの構造

- ・ 天窓
- ・ 2本の柱
- ・ 屋根の垂木
- ・ 格子状の壁
- ・ 扉



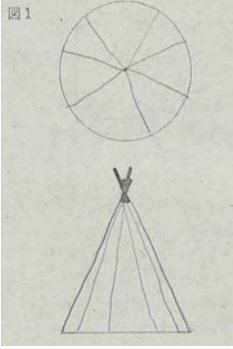
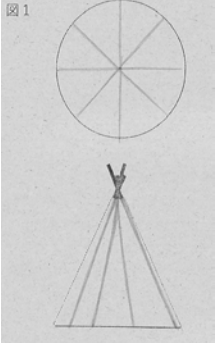
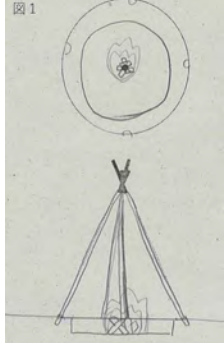
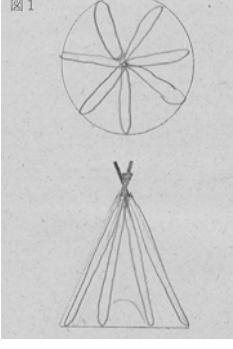
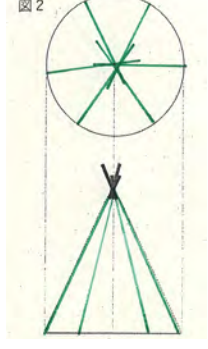
1セット
の価格は、
15万円

分解したゲルの部材
を確認。
壁材の変形を確認。

	・ゲルの使用上の利点（減災の視点で） 避難が容易 居住性が良い（移動型では） ・建築上の特徴 軽量・コンパクト 特に壁材とロープにかかる力のつり合い ○問題演習によるまとめ 演習（プリント No. 2 を解く） 国際理解授業 建築技術科 No. 2 Q 1 以下の文章において、括弧の中に当てはまる適切な語句等を選んで答えよ。 自然災害の被害には、直接死と災害（ ① ）死がある。 被害を抑えるためには、事前の準備が重要になる。 以下 略	減災の工夫 工夫の余地あり （建築の視点） ロープの張力の向き 開発のヒント 採点と要点確認	プリント No. 2
9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法） 提出されたノート（プリント添付）を元に評価する。			
10. 学習方法および外部との連携 今回の研究授業では、準備および実践の段階での外部連携はない。			
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み 今回の研究授業は、建築技術科 1 年の、「科学と人間生活」			

【自己評価】

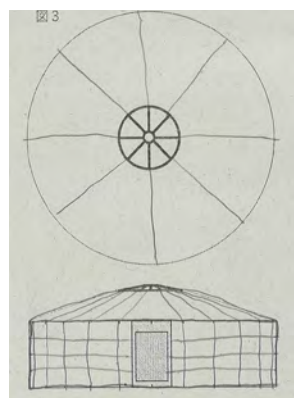
12. 成果	・工業高校の建築系の科に対応した授業をできた。（科目・「科学と人間生活」の防災教育における単元で、「ふるさと教育」・「国際理解教育」を兼ね、科の専門性につながる授業になった。） ・この研究授業とは別に、工業高校の機会系と電気系の科に対応した授業をできた。（科目・「科学と人間生活」の電磁波における単元で、「国際理解教育」と、科の専門性につながる授業になった。） ・モンゴルを題材にしながらも、他国にも共通する課題を取り入れることができた。 ・他国の文化を、肯定的に紹介することができた。
13. 課題	・専門性の高い授業になった反面、汎用性が低い教材になった。

14. 改善点	・ 建築系の専門性を薄め、全ての科で共通した「科学と人間生活」の防災教育における単元の教材にしたい。必要に応じ、さらに専門性を薄めると、一般的な「科学と人間生活」の防災教育における単元の教材にもなる。 ・ 機械系と電気系の授業も専門性を薄め、全科共通の教材にしたい。その際、「科学と人間生活」の電磁波の単元から、「物理基礎」の電気の単元に変更したい。結果的に2年生にも国際理解教育を導入できる
15. 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	○ティピーの構造（生徒想像図） 生徒が描いたティピーの構造の想像図。ほとんどの生徒が、その特長をよくとらえていた。まだ、製図の力は不十分で、矛盾点が見られる図もある。しかし、外観のイラストと簡単な説明だけで、安定した構造を想像できている。卒業時には身近な材料を用いて、設営できると思われる。 生徒①  生徒②  生徒③  生徒④  生徒⑤  解答例（教師作成） 

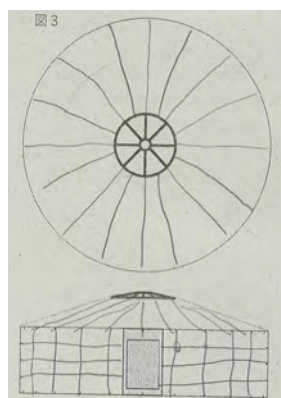
○ゲルの構造（生徒想像図）

生徒が描いたゲルの構造の想像図。多くの生徒が、屋根の垂木を放射状に描いていた。生徒④のユニークな構造も、理にかなっている。壁の構造は、多くの生徒が柱（鉛直）と梁（水平）の組み合わせであった。筋交い（斜め方向）を書き入れた生徒もいた。典型的な日本家屋の構造である。張力を担うロープを書き入れた生徒はいなかった。生徒にとってゲルは斬新であったようだ。今後、彼らの開発のヒントになることを願っている

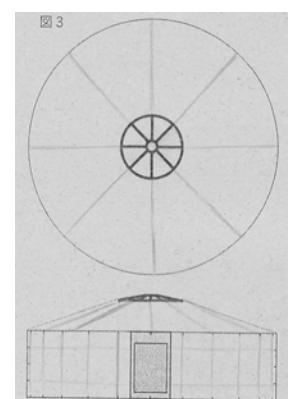
生徒①



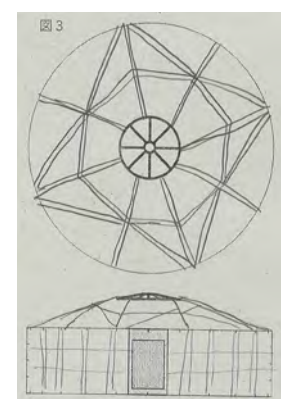
生徒②



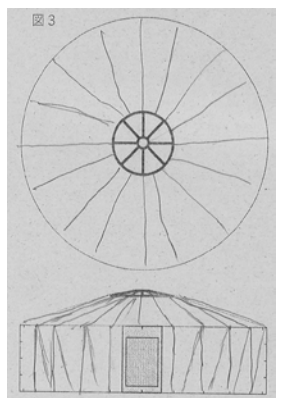
生徒③



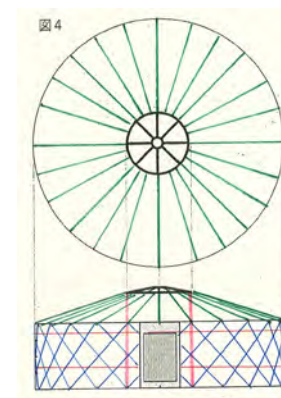
生徒④



生徒⑤



解答例（教師作成）



16. 授業者による自由記述

科学や科学技術は、世界共通であることが多い。例えば、数式や元素記号、そして、法則などである。また、自然環境については、全世界にその代表例があり、地球全体で理解すべきことも多い。そのため、通常の理科の学習は、国際理解教育でもある。

本来、授業においては一例にすぎないモンゴルを、主な題材に取り上げることは、主従が逆転したような違和感があった。通常のカリキュラムに落とし込むことに、苦戦した。試行錯誤した分、今後も活用できる授業スタイルができたと思っている。

国際理解教育と銘打って授業を行ったことは、初めてであった。しかし、国際理解教育のための事業には、この10年間ほど、深くかかわってきた。

前任校は出身校でもあり、勤務期間より同窓会活動に関わり、そして、多くの事業の創設に携わった。特に、同窓会が母体となる公益財団法人の設立は、在校生の海外派遣など、国際理解教育の発展に寄与できたと考えている。

その一方で、海外派遣等に関わる生徒への直接の指導は、自分自身の力不足を痛感していた。

さらに、公益財団法人の安定的な運営の難しさにも直面してきた。

今回の教師海外研修のおかげで、多様な経験と、多くの人との繋がりを得た。今後の組織運営に役立つと感じている。

今は試行錯誤の母校への支援であるが、いずれは一つの成功例にしたい。そのときは、このような支援の方法が全国に広がり、国際理解教育も拡大すると信じている。

参考資料：

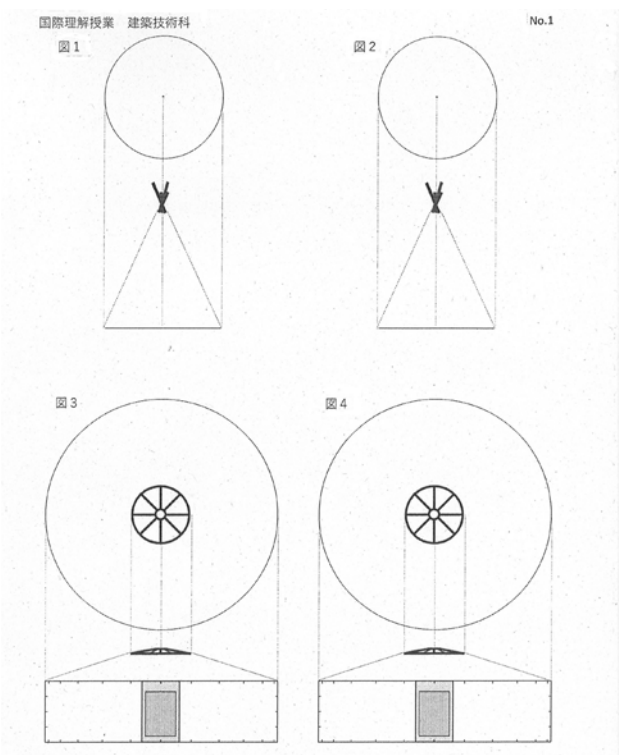
ウィキペディア

パワーポイント⑦のティピーのイラスト

パワーポイント⑧のゲルの写真

資料 1 - 1 プリント No. 1

- ・図 1 はティピーの、図 3 はゲルの構造の想像図を描く位置。
- ・図 2 はティピーの、図 4 はゲルの構造の解答例を描く位置。
- ・B5 ノートに添付するため（見開き左ページ）、B5 より少し小さいサイズ。
- ・このプリントはノート見開きの左ページに添付。右ページは補足・説明用。



資料 2 プリント No. 2

- ・まとめを兼ねた演習問題
- ・B5 ノートに添付するため（見開き左ページ）、B5 より少し小さいサイズ。
- ・解答や修正は、ノート見開き右ページに記入。

国際理解授業 建築技術科 No.2

Q1 以下の文章において、括弧の中に当てはまる適切な語句等を選んで答えよ。

自然災害の被害には、直接死と災害（ ① ）死がある。被害を抑えるためには、事前の準備が重要になる。

公助が整った国の例がイタリアである。災害（①）死を減らすための仕組みが整備されている。国の機関である「市民保護局」が避難所の運営の仕組みを定めている。それには、大きく2本の柱がある。

・充実した（ ② ）

・（ ③ ）ボランティア

その結果、短時間で支援が可能になっている。

アメリカインディアンの夏季の移動住宅である（ ④ ）は、布の他は、材料が手に入りやすい。アメリカ軍のサバイバルマニュアルにも採用されており、自助による簡易な住居確保の例である。

能登半島地震における共助の例として、（ ⑤ ）での共同生活があった。1次避難所として機能したが、最長で9か月の避難生活が続いた例もあった。

災害に強い住宅の例として、モンゴルの（ ⑥ ）がある。軽量の移動式で、避難も容易である。また、強固ではなく、しなやかな構造である。

ゲルの格子状の壁は、分割式で折り畳み式である。屋根の垂木の重みが壁にかかる。壁は（ ⑦ ）方向に縮み、（ ⑧ ）方向に延びる。そのままだと、壁は低く長くなる。それを防ぐために、壁の外側には（ ⑨ ）が固定してある。（⑨）による力が均等にはたらくため、壁の形状は（ ⑩ ）になる。

ア 関係 イ 関連 ウ 嗜好品 エ 設備 オ やる気に満ちた
 カ 訓練を受けた キ 雇われた ク ビビリー ケ ヒッピー
 コ ティピー サ 防空壕 シ シェルター ス ビニールハウス
 セ ゴル ソ ザル タ ゲル チ バル ツ 東西 テ 南北
 ト 鉛直 ナ 水平 ニ ロープ ヌ 柱 ネ 梁 ノ 三角柱
 ハ 四角柱 ヒ 円柱 フ 三角錐 ヘ 四角錐 ホ 円錐

① イ ② エ ③ カ ④ コ ⑤ ス
 ⑥ タ ⑦ ト ⑧ ナ ⑨ ニ ⑩ ヒ

ジブンゴトとして ～モンゴルの優しさに応えよう～

赤池 美里 熊本市立 泉ヶ丘小学校

■教科・科目：社会、道徳、総合、特別活動等 ■対象学年（人数）：6年1組・2組（64名）
■実践年月日・期間（時数）：2024年9月～12月（10時間）

【実施概要】

1. 単元名（活動名）：ジブンゴトとして　～モンゴルの優しさに応えよう～					
2. 実践する教科・領域：	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）：					
・モンゴルや外国の文化・歴史に関心をもち、日本との共通点・相違点・つながりを考える活動を通して、その共通点やつながりに喜びを感じつつ、相違点についても理解し、受け入れようとする態度を育てる。 ・世界における日本の役割や国際協力の実態について知り、水俣病を経験し学んできた熊本県民の視点でモンゴルの大気汚染問題を見つめ、ジブンゴトとして捉えて自分にできることなどを考えることができる。					
5. 単元の評価規準	①知識及び技能	・世界には様々な国があり、それぞれに文化があることを理解している。 ・親日国家の存在を知り、その国が日本のために努力してくれていることについて理解している。 ・モンゴルをきっかけとして、国際社会の一員としての日本の役割を理解している。			
	②思考力、判断力、表現力等	・モンゴルと日本の文化の共通点や相違点を見つけ、よさを考えようとしている。 ・モンゴルの抱える大気汚染問題と熊本の水俣病問題を重ねて考えながら、モンゴルについての学びを踏まえた議論ができる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	・モンゴルの文化や歴史に興味をもち、自分の意見や考えをみんなで共有しようとしている。 ・モンゴルや世界で起きている社会問題について、同じ地球の一員として関心をもち、課題解決に向けて意欲的に考えようとしている。			

6. 単元設定の理由・単元の意義

(児童 / 生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由あるいは単元の意義】

世界には多くの国がある。本単元ではモンゴルを例に挙げ、実際の写真や動画、現地で購入したアイテム等を多く用いることで、児童が興味関心をもって、日本との「同じ」「違い」「つながり」に気づくことができるようにしたい。前半では衣食住や元寇などから「同じ」や「違い」に気づいていけるようにする。後半では、前半の気付きも踏まえながら、モンゴルと日本の「つながり」に焦点を当て、モンゴルの人々が抱く日本への思いに気づき、世界で起きていることをジブングトとして捉えられるようにしたい。

【単元設定の理由あるいは単元の意義】

世界には多くの国がある。本単元ではモンゴルを例に挙げ、実際の写真や動画、現地で購入したアイテム等を多く用いることで、児童が興味関心をもって、日本との「同じ」「違い」「つながり」に気づくことができるようにしたい。前半では衣食住や元寇などから「同じ」や「違い」に気づいていけるようにする。後半では、前半の気付きも踏まえながら、モンゴルと日本の「つながり」に焦点を当て、モンゴルの人々が抱く日本への思いに気づき、世界で起きていることをジブングトとして捉えられるようにしたい。

【児童観】

本学級は外国語の授業で、ALT の出身国の食べ物について積極的に質問をしたり、発表の時に自分の知らない英単語を身振り手振りなどでなんとか表現したりしようとする粘り強さがある。教師海外研修参加前に、モンゴルの子どもたちに手書きのメッセージカードを届けたいと話をする、外国で流行っているアニメを調べてキャラクターを描いたり、「日本にも遊びに来てね」とモンゴル語で伝えるために翻訳アプリを駆使して思いを書いたりしようとする姿が見られた。「鶴が（本当に）いるか聞いてきてください。」「モンゴルのご飯が気になります。」など質問してきてほしいことを担任に伝えるなど、モンゴルに対して興味があるようである。

2 学期のはじめに、モンゴルについて知っていることについて 6 年生児童に対しアンケートを行った。キーワードとして「寒い」「零下 40 度」「アネハヅル」が多く挙がった。この理由としては 1 学期末に国語科で学習した物語文「風切るつばさ」の存在があるだろう。この話はモンゴルで作られた話ではないが、話の舞台が冬を目にしたモンゴルであり、主人公のアネハヅルが南の国へ向けて飛ばないと凍死してしまうという状況に迫られながら物語が進んでいくため、インパクトが大きかったのだろう。一般的にモンゴルと聞いて連想される「遊牧」や「ゲル」等のキーワードを出した児童は約 60 人中 5 人程度にとどまった。

以上のように外国に対して興味がある児童は多い。しかし、ニュース番組などのメディアから得たネガティブな情報からだけで「この国は〇〇だ。」と決めつけるなど、他国の文化や習慣の違いを受け入れられていないような発言も見られる。世界に住む人々はみな、それぞれの文化や習慣をもち、その文化を大切にして生活していることに気づき、モンゴルをはじめとして世界の諸課題をジブングトとして捉えられる大人になってほしい。

【教材観】

モンゴルで実際に見てきたことを、写真や動画を通じて子どもたちと一緒に考えていく。また、日本で手に入るウールとモンゴルで買ったウール、日本のお金とモンゴルのお金を比較する活動も取り入れ、目や耳だけでなく、五感でモンゴルを感じられるようにする。モンゴルの文化や習慣、思いを十分に知った後で、モンゴルが抱える大気汚染の問題に関係する資料も提示し、他の国の問題も自分に関係のある事柄として捉え、国際社会の一員としての自分の在り方を考えられるようにしたい。

【指導観】

第1時、第2時では、教師海外研修を通じて得た経験を、写真や動画だけでなく、紙幣やウールなどの実物を教材として用いて、日本とモンゴルの「同じ」と「違い」に気づかせ、モンゴルへの興味を引き出していく。第3時では、社会科の歴史で元寇を学習した後に、モンゴルの歴史の教科書を活用しながらモンゴルがどのように元寇や日本を認識していたのかについて知る。モンゴル帝国の偉大さを認識し、鎌倉時代を生きた人々の立場に立って元寇をもう一度捉え直す時間を作る。

第4時では道徳でマンホールチルドレンの題材を通じて、世界には毎日を生きていくことさえも難しい子どもたちがいること、また、その子どもたちも夢や希望をもって生きていることに気づけるようにする。学んだ上で自分が募金したい額の議論を行い、金額の多少にかかわらず、相手のことを知り、思いやろうとすることが大切であることが感じられるようにする。第5時ではJICAの活動について知り、モンゴルに対しての国際協力にはどんなものがあるのかという興味を持てるようにする。第6時、第7時では、第1時、第2時に引き続き「同じ」「違い」に気づきつつ、JICAやNGOのモンゴルでの活動を中心にモンゴルと日本の「つながり」にも焦点を当てていく。

第8時では、長崎の修学旅行で学んだ戦争の恐ろしさと重ねながらモンゴル・シベリア抑留の現実を知る活動を取り入れる。ダンバダルジャー日本人慰霊碑や日本人抑留者のゲル博物館「さくら」を大切に管理するモンゴル方々の思いに触れ、世界の平和や他国を思いやる気持ちの重要性に気づけるようにする。第9時（本時）では、5年生で学習した「水俣病」と今のモンゴルが抱える「大気汚染」を重ねて考えながら、国の発展と環境保全のバランスをとることの難しさに気づいたり、熊本が歩んできた道をモンゴルも歩んでしまうかもしれないことに気づいたりして、ジブンゴトとして捉え、危機感を感じられるようにする。その中で、自分にできることは何かを考えながら活動できるようにする。最後の第10時では、チンギスハーン国際空港の看板にあるメッセージがもつ意味について議論する。そして、国際社会の一員として自分に何ができるかを常に考える素地を身に付けていけるようにする。

7. 単元計画（全10時間）※全ての時間でワークシートを用いる。

時	ねらい	学習活動	資料等
1 社会	モンゴルってどんな国？①	写真や動画を見て、クイズ形式でモンゴルの食事や地理的情報について知る。	モンゴルの写真・動画

2 社会	モンゴルってどんな国？②	写真や動画を見て、クイズ形式でモンゴルの人々の暮らし方（遊牧民、都会暮らし）を知る。	モンゴルの写真・動画、くるぶしの骨
3 社会	モンゴルから見た元寇	チンギスハンやフビライハンを中心にモンゴルの歴史を学ぶ。またモンゴルの教科書と日本の教科書を比較し、鎌倉時代を生きたそれぞれの国の人々の目線で元寇を捉える。	モンゴルの教科書 モンゴルのお札
4 道徳	マンホールチルドレンから学ぶ。	マンホールチルドレンの実態を知り、願いや夢について考える。自分の貯金箱からいくら募金したいかを議論する。	マンホールチルドレンの写真 東日本大震災についての記事
5 総合	JICA って なん だ？	JICA の YouTube を視聴し、発展途上国の困りと、それに対し日本が行ってきた活動について知る。	JICA の HP や YouTube 参照
6 総合	日本がモンゴルのためにしたこと① ～太陽の子どもたち、GOBI 工場、オイスカのハンドメイド～	第4時と繋げて、養護施設の太陽の子どもたちの存在やそこで働く人々の思いを知る。また、カシミヤが現地で採れる材料であることを知り、国際協力についての理解を深める。	各施設の写真・動画 マフラー、スリッパ
7 総合	日本がモンゴルのためにしたこと② ～日蒙病院、玉ねぎ農場～	原産地であるモンゴルで玉ねぎの栽培を伝える理由や歴史的背景に目を向けて考えたり、病院で働く日本人の思いを知ったりすることで、国際協力についての理解を深める。	各施設の写真・動画
8 社会	モンゴル・シベリア抑留と今のモンゴルについて知ろう	戦後の歴史を知り、今のモンゴルの人々の日本への思いを知る。	日本人墓地・ノゴーンノールの写真・動画
9 総合 本時	モンゴルの大気汚染問題について考えよう。	モンゴルの気候、伝統的な生活様式、石炭ストーブなどの問題を踏まえ、公害学習での学びと重ねながら、モンゴルが直面している大気汚染問題について議論する。	これまでに活用したモンゴルの資料
10 総合	モンゴルの「日本大好きだよ！」に応えよう。	チンギスハーン国際空港のメッセージを読み解き、国を超えて人々と関わることのよさや大切さについてまとめる。	空港のメッセージの写真

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：これまで学習したモンゴルの気候や生活様式、文化を踏まえながら、モンゴルが抱える「大気汚染問題」について知り、問題解決の方法について議論する活動を通して、その複雑性や共通点に気づき、世界で起きている社会問題をジブンゴトとして捉えることができるようにする。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (10分)	1. モンゴルクイズを通して、これまでに学んだことを想起する。 2. モンゴルの大気汚染の存在について知り、原因を考える。	○事前にエネルギー資源について学ぶ機会を設定しておく。	・ロイロノート ・モンゴルの写真 ・動画
モンゴルの大気汚染問題の解決策を考えよう！			
展開 (5分)	3. モンゴルの大気汚染問題についての動画を視聴する。	○大気汚染の原因の1つにゲル地区の石炭使用があるという事実を伝える。	・ワークシート ・ウランバートルの大気汚染についての動画
(15分)	4. これまでモンゴルについて学習したことをもとに、「ゲルの使用は禁止すべきか」、「ゲルの使用は禁止すべきでないか」について議論する。 ★個人→全体議論	○教師が「ゲルを禁止してしまえばよいのでは？」と揺さぶることで、モンゴルの文化や現状を踏まえながら議論できるようにする。	・これまで学習した写真や動画
(10分)	5. 大気汚染に苦しむモンゴルの子どもたちに、泉ヶ丘からアドバイスを伝えよう。	○「モンゴルの子どもたちへ。」で始まる手紙のような形式として記述する。	
まとめ (5分)	6. 振り返りをする	○5年で学習した水俣病について触れ、モンゴルの問題をジブンゴトとして捉えた振り返りが書けるようにする	

9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）

- ・モンゴルが抱える大気汚染問題が、現地の人が暖をとるには欠かせない石炭ストーブの使用と深く関係していることに気づいている。（発言、ワークシート）
- ・モンゴルの大気汚染問題をジブンゴトとして捉え、困りに共感し、問題解決の方法について自分なりの意見をもったり、共有したりしている。（発言、ワークシート）

10. 学習方法および外部との連携	・写真や動画を積極的に活用し、モンゴルの今の様子を実感できるようにする。 ・毎時間の初めに前時までの復習を行い、既習の知識と新しい学びを関連づけながら学べるようにする。
11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	・校内研修で全職員にモンゴルで学んだことを発表 ・授業実践を他の教員が参観 ・全校集会でクラス代表児童が全校児童に学んだことを発表、異学年とも意見交流

【自己評価】

12. 成果	社会科における歴史学習や、道徳におけるマンホールチルドレンについての議論、総合的な学習の時間におけるモンゴルについて知り、考える活動を通じて、モンゴルや環境問題を身近に感じられるようになった。休み時間の児童同士の会話の中からモンゴルの話が聞こえてきたり、算数の授業でお金の話になった時は「モンゴルで言ったら〇トゥグルグ（モンゴルの通貨単位）だね。」と嬉しそうに発言したり、社会の授業でノルマントン号事件を学習したときには「モンゴルのように優しい気持ちがあれば、こんな事件にならないのにね。」とつぶやいたりした。子どもたちの中に「モンゴルってとても優しい」という認識が生まれ、その認識が授業の回を重ねるごとに深まっていったように感じる。環境問題についての議論でも、自分なりに深く考えられた児童が多くいたように思う。
13. 苦労した点	モンゴル研修を通して自分の目でみて、肌で感じ、現地の人と関わることの大切さを再確認できた。自分が感じたすべてを、クラスの子どもたちに伝えたいと強く思った。しかし、時数が限られていることや、小学生が学習するには予備知識を蓄える必要がある難しい内容もあり、単元の構成や内容を簡単な言葉に置き換えていくことに苦労した。子どもたちが興味をもっていた、衣食住や鶴の話から授業を始めていくように心がけた。
14. 改善点	社会科や総合的な学習の時間で扱った、「モンゴル・シベリア抑留」や、化石燃料の問題が絡む「大気汚染問題」は、子どもたちが理解をするのにとても苦労していた。授業を受けたのは6年生であり、平和学習や歴史教育、環境を受けていたため、なんとか話について来ようとしていた。今後、6年生はもちろん、1から5年生でもモンゴルについての実践をしていく際には、子どもたちの実態把握をより丁寧に行い、必要となる知識や考え方のスタートラインを揃えてから授業を行うようにしたい。
15. 学びの軌跡 (児童生徒の 反応、感想 文、作文、 ノートなど)	授業では毎回ワークシートを準備した。シートの左側がメモ欄、右側が「同じ」「違い」「つながり」について、気づいた時にどんどん書き込めるようにした。授業の最後には「ふりかえり」の時間を必ず設定した。下の写真は、児童のワークシートを中心としてその1時間での学びを足跡として残し、掲示したものである。(順に、第3時、第8時、全体)



下の写真は 12 月に本校で実施する、「なかよし集会」という人権について考える集会で、モンゴルについて学習した 6 年生児童が全校児童に向けて、モンゴルの優しさについて発信しているところである。発表を受けて、5 年生児童は「モンゴルと日本が優しさのきずなでつながっていると分かりました。私もいま、横にいる友達を大切にしたいです。」、また 1 年生児童は「モンゴルって優しくて仲良しだなあって思いました。」と感想を述べた。



グローバル社会で私ができること～問いを立て続ける～ 第2章～

徳森 千鶴

私立 龍谷中学校・高等学校

■教科・科目：国語・SDGs推進教育 ■対象学年（人数）：中高一貫4年A組（19名）

■実践年月日・期間（時数）：2024年7月～12月（全8時間）

【実施概要】

1. 単元名（活動名）：グローバル社会で私ができること～問いを立て続ける～第2章～					
2. 実践する教科・領域： ●総合的な探求の時間 (FLP: Future Leaders Project)	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）： ・JICA 海外協力隊モンゴル国の要請に基づいた高校生国際協力実体験プログラム・ワークショップを通して、モンゴルと日本のつながりを知り、ODA について理解する。（高校生国際協力実体験プログラム参加生徒が主導で行う） ・5月～10月のFLPでまとめてきた各自の「グローバル社会への問い」を再確認して、さらにグローバル社会で自分の強みをどのように活かすか、再考する。					
5. 単元の評価規準	①知識及び技能	・新たな異文化について理解している。 ・日本のODA、草の根交流について理解している。 ・グローバル社会における困りごとについて、再確認している			
	②思考力、判断力、表現力等	・グローバル社会における困りごとについて4月から自身で考えてきた「問い」を再考して、自分ができることを見つめ直している。 ・世界で求められていることと自分の強みを見つけようとしている。 ・グローバルに生きるため、世界を見つめて視野を広げつつ、足元を固めようとしている。			
	③学びに向かう力	・来年の龍谷中学校・高等学校理数グローバル学会本発表に向けて、新たな目標を立て探求しようとしている。 ・世界で活躍する多くの人の生き方を学び、自分の進路選択に生かそうと意欲的に取り組んでいる。			

6. 単元設定の理由・単元の意義

(児童／生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由あるいは単元の意義】

研修前は、私自身が普段の生活ではなじみのないモンゴル国をただ生徒に伝え、世界に目を向けさせようとしていたが、研修後、大きく方向転換することとなった。「国」の前提に「人」があり、この「人」を通して初めてその「国」を知ることが出来ることを私自身が実感したからだ。そこで現地で出会った「人」にスポットを当て、私の感じたありのままを生徒に伝える。またこの研修でご縁があった日本とモンゴルの架け橋となっている方の講演を拝聴することで、生徒の進路選択の幅を広める。さらに、私が今回身をもって学んだ、「人」を知ることを通して初めてその人の「国」について理解が深まるということを生徒にも気付かせたい。さらに、これをきっかけに国際社会への関心を高め、自国を知り、自他ともに認めあえる社会の一員になることを目指す人に成長することを期待する。

【生徒観】

本学級の生徒は、中学1年生からSDGsについて学び、世界の問題を「ジブンゴト」化して解決を試みる活動を行っている。中学3年時には海外語学研修で、シンガポールに出向いて異文化を肌で感じ、また「アイ」を見つけるというテーマのもと、自他を認める心を養っている。外国と日本の違いを認める心を、身近な友人の異文化にも目を向けて、寄り添い理解するエンパシーを養っている。4月から高等部となり、来年のRG学会に向けて、「グローバル社会で私にできること」を探究している。11月末に中間発表を終え、来年度に向けて第2章に入る前に、この単元で、新たな視点を持ってほしいと考える。

【教材観】

本単元では、あまり周知されていない「日本とモンゴルのつながり」に目を向けさせたい。この「つながり」には、先人・JICA・草の根・多くの関係機関の「人」が長年にわたって（今もなお）関わっており、今現在の日本に対する信頼も信用も、すべて一朝一夕で築き上げられたものではないということを知ることで、今後の進路選択にも影響を与えることができる。また、ODAを正しく理解することで、支援とは一方的なものではないことを知る機会とする。第4時、JICA九州高校生国際協力実体験プログラムで体験した生徒をメインにJICAデスク佐賀石川洸氏のサポートの元、「BafaBafa」を体験することで、自分の常識が全てでないことを実体験させたい。第6時では、新モンゴル学園の「サマースクール」を創設した村上徹也氏の生き方から、これまでの人生観を見つめ直すきっかけとしたい。そして第7時（本時）、モンゴルで出会った「人」を通して見てきた「モンゴル」を伝え、いかに「人」が大切か、つまり「あなた」や隣にいる「友人」も大切であることに気づいてほしい。そして、日本に・自分に誇りをもって次のステップに進める時間にしたいと考える。

【指導観】

第4時、JICA九州高校生国際協力実体験プログラムに参加した生徒をメインにJICAデスク佐賀、石川洸氏のサポートのもと、異文化体験「BafaBafa」を体験することで、自分の常識が全てでないことを実体験させたい。第6時では、新モンゴル学園の「サマースクール」の創設メンバー村上徹也氏の生き方から、これまでの人生観を見つめ直すきっかけにしたい。そして第7時（本時）、モンゴルで出会った「人」を通して見てきた「モンゴル」を伝え、いかに「人」が大切か、ひいては「あなた」や隣にいる「友人」も大切であることに気づいてほしい。そして、日本に・自分に誇りをもって次のステップに進める時間にしたいと考える。

7. 単元計画（全 10 時間）※全ての時間でワークシートを用いる。			
時	ねらい	学習活動	資料等
1	モンゴルってどんな国？①	写真や動画を見て、クイズ形式でモンゴルの食事や地理的情報について知る。	モンゴルの写真・動画
2	モンゴルについて関心を高める。②（国語）	前時の内容のプレゼン資料を作成して、共有をする。	Keynote
3	モンゴル国の子どもを想像してメッセージを書き、日本とモンゴルの未来の架け橋となるきっかけを作る。（FLP）	モンゴルの生徒にメッセージカードを作成する。	・iPad（アドビイラストレーター） ・ハガキ
4	異文化体験を実体験することで、マジョリティー・マイノリティーさらに多文化共生について考える。（FLP）	「BafaBafa」異文化体験をして、外国人に対する見方について再考する。	・JICA デスク 佐賀 石川 洸氏 ・「BafaBafa」PPT 資料・ワークショップ材料
5	日本のODAについて学ぶ。（FLP）	高校生国際協力実体験プログラムに参加した生徒の報告を聞き、グローバル社会で生かせる自分の強みを考える。（龍谷中学校・高等学校理数グローバル学会にて）	Keynote
6	自分の将来の進路選択の視野を広げる。（FLP）	・キャリア教育の一環として、新モンゴル学園の「サマースクール」を創設された村上徹也氏の講話を聴聞する。（リモート講演）・講演後、感想・質問を送付・質問への村上氏の回答を報告	新モンゴル学園「サマースクール」創設メンバー村上徹也氏 Zoomにて
7	「人」を通して知る「モンゴル」を味わう。中学3年時のシンガポール海外研修を振り返り、違う角度で国際理解を試みる。（FLP）	ネットでは知りえない情報・文化・モンゴル紹介を聞く。「ジブンゴト化」するため、改めてこれまでに出会った「人」からその人の「国」を見つめて、発表スライドを作成する。	Keynote
8	「グローバル社会で自分にできること」～第2章～へ向けての探究活動前に、もう一度立ち止まり、この8時間を通して自分の変化・気づきを確かめ合う。（FLP）	前時でまとめた『「人」からその「国」を知る』発表を通して、クラスメートの知る「人」から色々な「国」を感じ、世界に目を向ける。そして、これまで学んできたことを振り返り、「グローバル社会で自分にできること」～第2章～の目標を定める。	Keynote

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：「人」を通して知る「モンゴル」を味わう。昨年度（中学3年時）のシンガポール海外研修を振り返り、違う角度で国際理解を試みる。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (10分)	・既習内容確認 何が一番心に残っているか、今後の進路決定に影響を受けた言葉・ことを共有する。		・各自がまとめた資料を確認
展開 (30分)	・ネットでは、知りえない情報・文化・モンゴルを知る。 ・想像通りだったこと・意外だったことを共有する。	・モンゴルの写真スライドを見せながら、「人」を中心に、紹介する。 ・生徒に意見を促す	・電子黒板 ・スライド資料
まとめ (10分)	・「ジブンゴト化」するため、これまで知り合った外国の人（日本人でも可）を改めて、思い出して、その「人」からその人の「国」を見つめる。 ・自分もまた、「人」である。自身は、どのような「人」でありたいか、日本の・自分の強みをかみしめる。そして、「グローバル社会で自分にできること」～第2章～に向けて、自分の変化・気づきを確認する。	・「グローバル社会で自分にできること」～第2章～に向けて、自分の変化・気づきを知り、今後に生かせるように、声掛けする。	・iPad Keynote

9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）

- ・「人」を通して知る「国」を確認して、グループワーク・まとめを通して、自分の強みを見つけようとしている。
- ・「グローバル社会の困りごと」について探究し、自身で考えてきた「問い」について一旦立ち止まり、再考して、自分ができることを見つめ直している。
- ・世界を見つめて視野を広げつつ、足元を固めることができる。
- ・来年の理数グローバル学会に向けて、新たな目標を立て探求しようとしている。
- ・世界で活躍する多くの人の生き方を学び、自分の進路選択に生かそうと意欲的に取り組んでいる。

10. 学習方法および外部との連携

- ・第4時・・・国際協力出前講座・高校生国際協力実体験プログラム・「地球発見ナビ」でお世話になっている JICA デスク佐賀の石川洸氏に異文化体験ワークショップサポートをしていただくことで目的をより明確にできた。本研修参加者が、校内外のプレゼン発表で学んできたことをアウトプットすることで、他の生徒の学習意欲が増した。クラスでも異文化体験ワークショップをしたことで、マイノリティーについて考えることができ、学校生活でも身近な人を大切にすることができるようになった。

・第6時・・・新モンゴル学園で知り合った村上徹也氏に人生の分岐点・決意・実行されていることを伺い、一つのご縁がきっかけで日本とモンゴルの架け橋となり、今なお活動が続けいらっしゃることを知ることで、人生は何が起こるかわからない、未来は無限大であることを知るきっかけになった。

(・単元外：モンゴル書道・・・佐賀でモンゴル書道を中学生が体験するのは新しいことであったため、佐賀の書道女流作家と書道教室指導者による参観があった。また、同時に書道サポートもしていただいたため、指導がしやすく、生徒達もモンゴル書道の芸術家として作品を仕上げられた。)

・学内展示・・・モンゴル書道作品(生徒によるモンゴル紹介)・『高校生国際協力実体験プログラム』と『教師海外研修』写真・モンゴル教科書・「シャガイ」・羊毛フェルトスリッパ・モンゴル紙幣等の展示をホールにすることで生徒同士が手に取り、触れ遊ぶことでモンゴルをより身近に感じることができた。

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み(今年度)

・8月末、中学1・2・3年生モンゴル書道体験(各2時間)

・9月1日、JICA九州(佐賀デスク)主催・地球発見隊ナビスペシャル交流会2024にて、「教師海外研修 in モンゴル」報告

・10月10日、「まなびいフェスタ」(県主催イベント)で生徒による高校生国際協力実体験プログラムプレゼン発表・活動紹介掲示・国際理解ワークショップ(佐賀在住の外国にルーツを持つ講師の先生とともに)

・11月16日、龍谷中学校高等学校数理数グローバル学会にて、高校生国際協力実体験プログラム体験報告プレゼン発表。モンゴル書道・モンゴルについて知ったこと・モンゴル書道体験感想の展示、モンゴル教科書・紙幣・伝統遊具(シャガイ)・羊毛フェルトスリッパ展示

・11月(3時間・国語)高校生国際協力実体験プログラム・モンゴルからのJICA海外協力隊要請内容(栄養士)について中学3年生が試案・プレゼン発表。(教師海外研修後、新たなモンゴルの実情〈若い世代は、体格がとてもいいこと・時間割の関係で給食の時間が取れないことなど〉も考慮した上で提案を考えた)

・10月20日、えびすFM「スマイルダイアリー」(本校ラジオ番組)活動報告

・12月12日、SDGs推進教育～多文化共生プログラム～(外国人って何?本当の意味での多文化共生・グローバル社会で生きていくために)講演会 対象:生徒・教職員・保護者・地域の方

・3月16日、JICA九州(佐賀デスク)主催・地球発見隊ナビ交流会にて、「教師海外研修 in モンゴル」後に授業でどのように活かしたかの報告(参加者のモンゴル書道体験も予定)

【自己評価】

12. 成果	・異文化理解「BafaBafa」ワークショップでは、高校生国際協力実体験プログラム体験生徒主導だったからこそ、クラスメートはより真剣に説明に耳を傾け、異文化を肌で感じる事が出来た。そして、マイノリティーの存在や今現在、日本で生活している異文化の人について思いを馳せ、自身が体験したことから何が出来るかについて考えた。 ・「人」を通して「モンゴル」を伝えることが出来たと実感する。授業後、自主的にモンゴルについて調べ、『地理』の世界発見プレゼンに「モンゴル」を選んだ生徒もいた。その後、生徒自身の知る「人」を通して「その人の国」紹介プレゼンでは、「実際、人との出会いがあって初めてその国のことについて理解できた」・「クラスメートの紹介でその国が近くなった」・「その国の人を大切にしていきたい」などの意見が出た。人と人との繋がりが世界平和につながることを感じたようだった。 ・中学生に行った「モンゴル書道」は、大変好評で、「習字は苦手だけど、楽しかった」・「さらさら書くことが出来ておもしろかった」などの意見があった。また、「モンゴル発見隊」として生徒自らモンゴルについて調べていくと「自分がやっている流鏝馬がモンゴルにもあるのを知って留学したいと思った」・「佐賀が誇る鷹匠。その鷹匠がモンゴルにも存在することを知った。今後モンゴルとも鷹を通して交流していきたい」というコメントに両国の架け橋をなる若い世代の意気込みを実感した。
13. 課題	・授業時間が限られている中で、教科の単元目標をいかに今回の研修を結びつけて活用できるか、生徒たちに還元できるかに苦戦した。帰国後の交流も踏まえ、研修前に訪問先の学校と何が出来るのかをより計画できるとより良いものになったと考える。 ・ユネスコ無形文化遺産にもなっているモンゴル書道が、現地ではさほどメジャーでないことに戸惑い、研修前に想定していた書道交流はできなかった。学校教育の中でも日本のように「書写教育」はなく、習い事での経験者はいた。ただ、帰国後、生徒たちは「モンゴル書道」を経験したからこそ、モンゴルに親しみを持てたので、きっかけとしてはよかった。
14. 改善点	・SDGsについて、本校生徒は中学時代からかなり学習し、実践している。この強みを生かして、現地の生徒たちと両国の課題解決意見交換会が出来たらと考える。この期間では実現できなかったのも、細く長く交流が出来たらと思うので、今後も現地関係者とつながっていく予定である。 ・時間が限られていることもあり、一方的な私のモンゴル「体験記」になってしまうことがあった。意識的に生徒の第一印象を発言させたり、写真からどのように感じるかを話し合う機会を持ったりしたが、じっくり時間をかけて、生徒が自主的にモンゴルを知りたいと思える仕掛けがあったら、より魅了できたと考える。

15. 学びの軌跡
(児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)

○ BafaBafa 体験感想

- ・マイノリティーがマジョリティーに馴染もうと努力することや、マジョリティーがマイノリティーを否定しないことが大事だと気付かされた。
- ・他文化がわからない状態で他の国に行くことでとても不安になった。今後、冷静に考える力を身につけたいと思った。
- ・海外の人が佐賀を観光している際、バスを使う時に迷いながら乗っているところを何度も見かけていたが何も思わず、声もかけたことがなかったが、今回体験してみて他国のルールが分からなくて聞ける人もいないと、いかに怖いのかを知り、今後の自分の行動を改めようと思った。
- ・異文化と言われたら外国のイメージしかなかったけれど、個人の家庭でも異文化はあると言われてハッとした。一人一人がそれぞれの文化を持っているのではないかと考えさせられた。
- ・異文化とは国だけではなく、地域や家庭でもあることと石川さんが仰っていた。その話にハッとさせられた。外国だと外国の文化をインターネットで調べることができるが、日本の地域だとそうは行かないので、他の地域から来た人に対して積極的なコミュニケーションをとっていこうと思う。

○村上徹也氏講演後の感想

- ・モンゴルの生徒は人見知りがなく、反応が良く、意見をしっかりと言うことが出来たことを知った。
- ・私が今進めている個人研究に活かしていきたい。将来は世界中いろいろなところを旅したいと思っているので、シャイにならずにしっかりとコミュニケーションをとって喋るということをこころがけたいと思った。
- ・先生は元々モンゴルと関係ない方であったにも関わらず、現在は一つのきっかけで両国の架け橋になっていらっしゃる。私もそのような人生を送っていききたいと思った。
- ・今、個人研究でちょうど行き詰まっていたところだったので、新たな視点を増やせて、グローバル社会で行かせる自分の強みについて改めて考えるととてもいい機会だった。

○『「人」を通して「国」を知る』感想（生徒発表後の感想）

- ・日本は言葉を工夫して表現するが、ルーマニアは体を使っての表現が豊かであることを知った。
- ・韓国人は、友人を誰一人取り残さないという温かさがあることを知った。
- ・韓国は、「みんなで」という意識が強く、仲がいいなと思った。
- ・身近な先生を通して確かにイギリスのお国柄がわかった。いつもポジティブで、ネガティブな発言を聞いたことがない、素敵な国だと思った。
- ・NETに3年間、否定的な言葉を聞いたことがない。イギリス人のように、肯定的に生きていきたい。
- ・ミャンマーの家族思いが伝わってきた。優しさあふれる国だと思った。
- ・昨年行ったシンガポール、私も他国・多文化を尊重する国だと思った。
- ・シンガポールで出会った大学生と今も連絡を取ってつながっていると、すごい。本当に優しい人達ばかりだった。また、シンガポールに行きたい。

The collage consists of several pages of educational materials. The top section, titled '食育を高める!' (Raising Food Education), features a lesson plan for 'モンゴルの食育' (Mongolian Food Education) with a focus on '私たちの家' (Our Home). It includes a list of reasons for eating Mongolian food, such as 'モンゴルは食育が盛んでいる' (Mongolia is thriving in food education) and 'モンゴルでは日本と違って食育を重んじるという習慣がないので、そこで食育して健康を促進したい' (Since there is no habit of valuing food education in Mongolia, we want to promote health by doing so). The middle section, titled 'モンゴルの食育' (Mongolian Food Education), includes a lesson plan for 'モンゴルの食育' (Mongolian Food Education) with a focus on 'モンゴルの食育' (Mongolian Food Education). It includes a list of reasons for eating Mongolian food, such as 'モンゴルは食育が盛んでいる' (Mongolia is thriving in food education) and 'モンゴルでは日本と違って食育を重んじるという習慣がないので、そこで食育して健康を促進したい' (Since there is no habit of valuing food education in Mongolia, we want to promote health by doing so). The bottom section, titled 'モンゴルの面白い表現' (Interesting Expressions of Mongolia), includes a lesson plan for 'モンゴルの面白い表現' (Interesting Expressions of Mongolia) with a focus on 'モンゴルの面白い表現' (Interesting Expressions of Mongolia). It includes a list of reasons for eating Mongolian food, such as 'モンゴルは食育が盛んでいる' (Mongolia is thriving in food education) and 'モンゴルでは日本と違って食育を重んじるという習慣がないので、そこで食育して健康を促進したい' (Since there is no habit of valuing food education in Mongolia, we want to promote health by doing so).

地球発見隊ナビ 2024 ～スペシャル交流会～



モンゴル書道体験



BafaBafa 体験



村上徹也氏講演会の様子



「まなびいフェスタ」



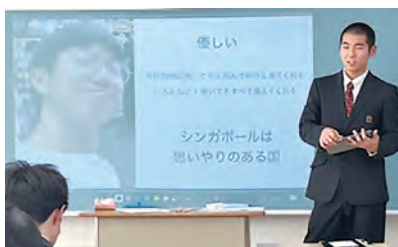
理数グローバル学会



モンゴル発掘隊「人」を通して「国」を知る



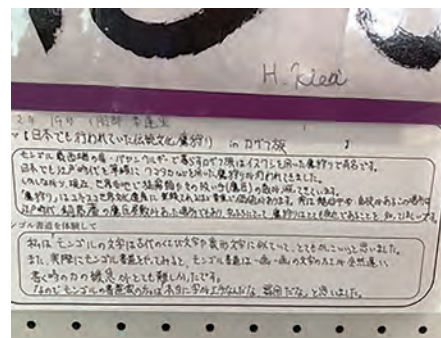
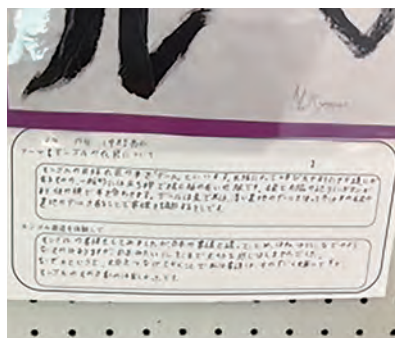
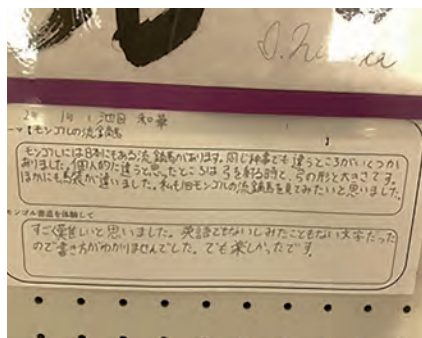
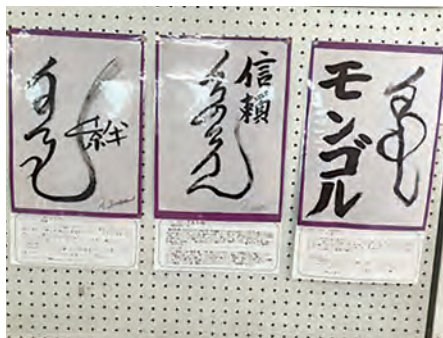
生徒発表 ～私の知っている「人」を通して「その人の国」紹介します～



JICA モンゴル事務所からの海外協力隊要請内容を再考察



校内ホール展示



研修を振り返っての感想（参加教員）

瓜生 真弓

福岡県飯塚市立穂波東中学校

私が本研修に参加した動機は、「他国の性に関する指導（特にジェンダー問題）を知ること」であった。実際に研修を終えると、想像していた以上のものが得られたと実感している。モンゴルでの、日本の ODA の状況を見聞したり、JICA 海外協力隊員の話や聴いたりすることは、本研修に参加することでしか得られないかけがえのない体験であった。どの訪問先にも、経済及び生活、健康、教育など様々な分野で尽力されている方々があり、私の知らない世界がそこにはあった。その方々の生き方に触れることで、「私もその世界の一員になりたい。」と考えた。また、県・校種・教科が様々な先生方と研修を共にすることで、自分にはない視点を得ることができた。先生方とのつながりを今後も大切にしていきたい。今回の研修に参加したことで、「自分も他者も認め共生していく力をつける。」という点で、国際理解教育・開発教育と性に関する指導の繋がりを感じた。今後も研究と修養に励んでいきたい。最後に、研修の機会を頂いた JICA 九州様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

徳森 千鶴

学校法人佐賀龍谷学園
龍谷中学校・高等学校

チンギスハーン国際空港を抜けると、、、そこは草原の香りがする大地でした。モンゴルに着いたという実感。「正月には、巣立った子どもたちが顔を出してくれるのよ。」「この施設の家具も、ここを巣立った子ども達の手作りよ。」児童養護施設長のこの言葉に愛を感じました。「渋滞時は、一般車両もタクシーに大変身。少し安いね。」「教科書は、お譲りもしくは古本屋でリサイクル。」自然と根付く持続可能なモンゴル社会を目の当たりにし、優しくおおらかな国民性を感じました。私も 6 年生の教科書を購入。何代か受け継がれたのか少々くたびれた、書き込みのある教科書に愛着がわきました。キリル文字からモンゴル文字への変換を手でなぞり、帰国後の今も楽しんでいます。この研修で出会った人を通して、モンゴルと出会えました。キーワードは「人」。今回、研修をともにしたメンバーとの出会いに感謝しつつ、日本の子ども達に“モンゴル”を伝え繋げていこうと思います。この機会を与えていただいた JICA 九州の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

丸谷 美寧

学校法人九州ルーテル学院
インターナショナルスクール小学部

私は学校を超えて繋がるご縁を楽しみに教師海外研修に臨みました。私が勤める開校 1 年目のインターナショナルスクールは、国際バカロレア（IB）候補校としてその実践を行なっています。IB のカリキュラムは世界平和を礎としており、各施設への訪問と研修参加者との対話は、それについて私に制限や場所を超えた「よい教育」の示唆を与えてくれました。特に印象に残ったのは、モンゴル語、英語、日本語と 3 カ国語で、日本式教育が行われている新モンゴル学園の校長先生との対話でした。「日本の教育の良さは学ぶための姿勢や意識づくりだ。」「モンゴルからの頭脳流出を食い止めたい。」と言い切っていた様子を今でも鮮明に覚えています。子どもたちが世界の問題を考える時、遠い国の出来事としてではなく、身近に思いやる誰かやつながりができるよう、心に留めて授業をしていきたいです。

夏井 ひとみ

宮崎県諸塚村立諸塚中学校

多くの学びがあり、大変有意義な研修でした。

「国際理解教育」や「国際協力」の私の以前の認識は、「異文化理解」や「協力や支援」でした。しかし、研修中に、「共生」、「調和」、「融合」、「バランス」、「ニーズの合致」、「共創」という言葉が頭に残り、これらの言葉から学んだこと・気づかされたこと・新発見がありました。それは、『つながり』=『「相手が持っている知識や技能・相手が必要としているもの」と「自分が持っている知識や技能」とで新しいものを一緒に創る共創』です。JICA 事業は、このようなことをモットーとし、日本と外国との懸け橋となる事業をされているのだと JICA の取組に感動しました。研修後の国際理解教育では、異文化理解で終わらず、このような日本と外国との懸け橋となる共創の JICA 事業や隊員の方々の生き方からのキャリア教育にも繋げていける授業づくりを計画しようと考えます。多文化共生社会から共創する社会づくりの授業です。素晴らしい学びの場を頂き、ありがとうございました。「村から世界へとつながる」授業づくりを頑張ります。最後になりますが、JICA 九州様、そして、研修中は共に共生し、共創した研修仲間の先生方、研修参加を応援して下さった諸塚村教育委員会や諸塚中の先生方に感謝しています。今後も、モンゴルをはじめ、多くの海外につながる授業づくりを計画予定です。研修の学びを還元し、村から世界に「つながり」、そして、新たな世界を「共創」していく授業づくりに励んでいきます。ありがとうございました。

立和田 理恵

福岡県立太宰府特別支援学校

未知の世界に触れ、見たことがなかった価値観や生き方に触れることができ、自己発見につながる経験になりました。特に、太陽の家の施設長の言葉は力強く心に残るものでした。

「子どもの可能性は無限にある。」というのは教育者として持ち続ける大切なことであり、また、「人の心は楽な方に行きがちであり、どんな子に対しても、『諦めない』という思いをもち過ごしている。」という言葉は教育者として、教師として、持ち続けていきたいと感じるものでした。

今後も知識や技術を教えることだけではなく、子どもがどのように生きるか、自分自身をどう理解するか、他人とどう関わるかという人間性を養うことを意識した教育をしていきたいと思います。素敵な機会を与えて下さった JICA さんに感謝します。

大町 淳 長崎県立島原工業高等学校

「ノゴーン・ノール（緑の湖）」はゲル地区にある児童公園です。そして、シベリア・モンゴル抑留における採石場跡で、資料館もあります。これらは、ウルジートクトフさん個人が運営しています。賛否両論をよそに、何か強い信念が彼を突き動かしていました。

彼だけではありません。多くの熱意と努力によって、両国の関係は築かれています。

私は、出身高校の同窓会活動を元に、公益財団を設立し、母校支援に関わってきました。特に、海外理解教育には力を入れてきました。先進的な例もありますが、まだ日本では珍しい活動です。このような活動が、普及することを願っています。今は多くの問題点も抱えています。しかし、解決のヒントは、今回の研修から得ました。

JICA 関係者の皆様には本当に感謝しています。そして、今後もお世話になります。よろしくお願いします。

赤池 美里 熊本県熊本市立泉ヶ丘小学校

「昨日会ったばかりの人と一緒に外国に行くなんて...」と不安になっていた出国前の私に、「最高の研修になるから行っておいで！」と自信をもって背中を押してあげたい！そんな研修になりました。モンゴル滞在中は学びの連続で、その中でもモンゴルが日本に向ける温かい気持ちや行動にとっても心が動きました。「この感動を全部6年生に伝えたい！」という想いを凝縮し、どうにか10時間に収めた授業実践。「今日モンゴル（の授業）ありますか？！」と目をキラキラさせる彼らに私もニヤニヤが止まりませんでした。知ったことをもとに考えを深めて、モンゴルでの環境汚染問題の解決策を本気で議論する彼らの姿はとても頼もしかったです。今回の研修をきっかけにして、これからもたくさんのご縁やつながりを大事にしながらたくさんの実践を積んでいきたいと思います。個性盛りだくさんのメンバーの皆さんも、大好きです。これからもよろしくお願いします。

研修を振り返っての感想（スタッフ）

宮原 良美

九州海外協力協会スタッフ

今回の教師海外研修では、モンゴルを訪れ、先生方とともに多くの学びを得ることができました。現地では、日本とは異なる教育環境や文化に触れる機会が多くあり、先生方が積極的に現地の方々と交流しながら多くの学びを得ようとしている姿がとても印象的でした。日本とは異なる生活や文化に触れる機会が多くあり、新しい環境で学ぶことの大切さを改めて実感しました。また、授業実践では、現地での学びをどのように教育現場に活かすかを真剣に考え、実践に移している先生方の姿勢を拝見し、これから先生方が国際理解教育 / 開発教育の新しい推進者となっていく事に大きな期待を感じました。この研修が、先生方にとって新たな学びや視点をもたらすきっかけになればと願っています。ありがとうございました。

山神 成正

九州海外協力協会スタッフ

今年度の教師海外研修に携わる機会をいただきました。研修は充実した内容で大変貴重な経験となりました。先生方がそれぞれの思いをもち、交流を通して互いに高め合いながら学びや気づきを得ている姿勢を拝見してきました。これからも先生方が児童や生徒のための教育を継続していただくことが願いです。モンゴルの各訪問先ではあたたかく迎えていただき、プログラムを通して国際協力の現場や教育現場、モンゴルと日本の関係、そして様々な人を知ることができました。事前研修、事後研修にご協力いただきました講師の皆さま、また現地でお世話になりました研修受入れ先団体の皆さま、JICA モンゴル事務所の皆さま、ありがとうございました。

スナップ集

馬乳酒の食レポ最中。文字通り馬の乳で作られた飲料である。見た目は牛乳のようであった。酸味が強く、発酵していた。「毎日飲むと、美肌になる。」と現地の方が教えてくれた。カルピスのルーツとなっているそうだ。(ダルハンに行く途中)



ソフトクリームスタンドでばしゃり！
(ウランバートル市内の道端で)



ハゾン・トゴー（モンゴル鍋）の昼食（ウランバートル市内で）



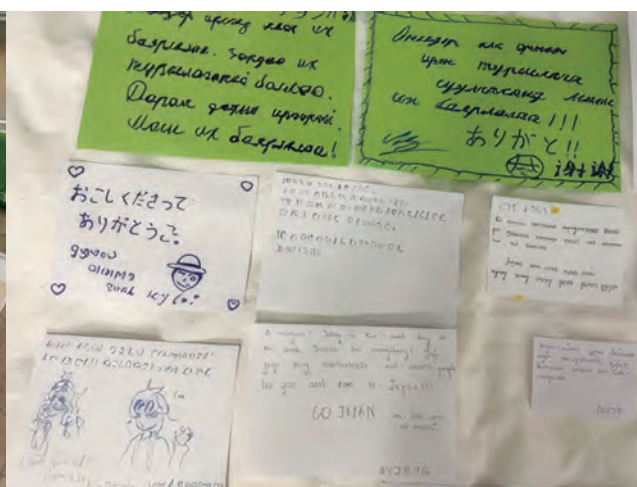
首都ゲル地区



社会主義時代からの集合住宅（ウランバートル市内）



参加教員が各学校で集めた日本の子どもたちから
モンゴルの子どもたちへのメッセージ



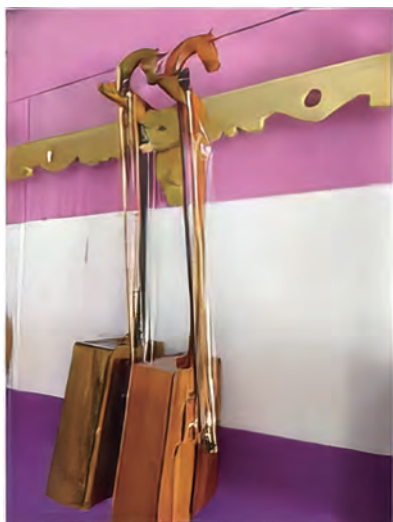
参加教員が交流したモンゴルの子どもたちから
日本の子どもたちへのメッセージ



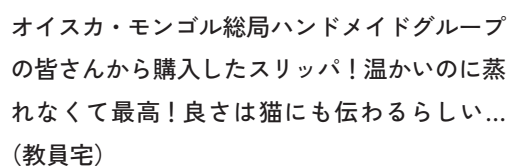
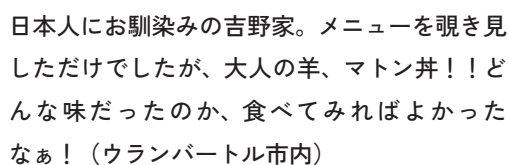
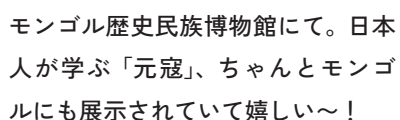
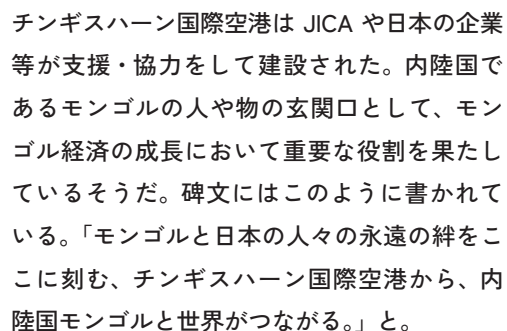
「書きたい字は？」と聞くと「家族大好き」でした！
(「太陽の子どもたち」児童養護施設)



憩いの場所で人々が興じていたのは将棋ではなく、
チェスでした（ウランバートル市内）



モンゴルの伝統的な楽器である馬頭琴。馬の彫刻
があり、美しかった。見た目だけでなく、その音
色はよく響き、美しいものだった。日本では「スー
ホの白い馬」という物語で有名である。(「太陽の
子どもたち」児童養護施設)



2024 年度（令和 6 年度）
JICA 九州 教師海外研修

発行 2025 年 3 月

【 発 行 者 】

独立行政法人国際協力機構 九州センター（JICA 九州）

〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1

TEL 093-671-6311

<https://www.jica.go.jp/kyushu/>

【 事 業 受 託 者 】

特定非営利活動法人 九州海外協力協会

〒805-8505 北九州市八幡東区平野 2-2-1 JICA 九州内

TEL 093-671-8678



2024 年度（令和 6 年度）

JICA 九州 教師海外研修 報告書

発行 2025 年 3 月

【発行者】

独立行政法人国際協力機構 九州センター（JICA 九州）

〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1

TEL 093-671-6311 / FAX 093-671-0979

【研修実施団体】

特定非営利活動法人 九州海外協力協会

〒805-8505 北九州市八幡東区平野 2-2-1 JICA 九州内

TEL 093-671-8678